伝承文学を豊かに語るための実験授業
── 愛知教育大学での試み

大野寿子

はじめに

幼稚園や小学校という教育現場において、絵本の読み聞かせや初等国語教育のテキストに、昔話や民話が頻繁に利用されている。このような読み聞かせ等の行為者を、現代日本における「伝承の新しい担い手」と位置づけ、この「伝承の新しい担い手」を伝承文学研究がサポートできないかという可能性を、我々「伝承の現場からの考察」グループは模索してきた。そして、将来、幼稚園・小学校教員になるべく研鑽を積んでいる学生たち、すなわち、将来の「伝承の新しい担い手」たちを対象に、伝承文学に関する実験授業を実施する運びとなった。

話を豊かに語ってもらうために、まずは「伝承の新しい担い手」自身に、その話の豊かさを実感してもらいたい。これが、実験授業の根底に流れる理念である。昔話の成立、類話、あるいはその文化的背景に触れるという授業を通じ、語り手がまず伝承文学世界を「体験」する。すると、そのときの感動、「おもしろい」、「興味深い」という実感が、語りを必ず豊かにしてくれるはずだと我々は考えるのである。このような仮説が通用するのかどうかを分析することが、実験授業の第一の目的である。さらに、これから「伝承の新しい担い手」となってゆく若い世代が、昔話を伝承するという行為を、どのようにとらえているかという実態を知ることを、実験授業実施における第二の目的とする。このような我々「伝承の現場からの考察」グループの理念を総合し、実験授業実施校として白羽の矢が立ったのが、教員養成を主軸とした筆者の勤務校である愛知教育大学であった[1]。

この試みにおいて、教員養成のためのさまざまな教科教育のあり方を批判したりするつもりは毛頭ない。そうではなく我々は、自分たちの伝承文学研究が、近い将来「語り」の実践という形で教育現場に立つ人たちに、語る上での「マメ知識」を提供できればと願っているだけであり、その「マメ知識」が、「伝承の新しい現場」を豊かにするということを、長期的に考えていきたいだけなのである。すなわち、生涯学習あるいは教養教育の延長線上に、我々の研究成果をとらえていただきたい。いわば、実践教育学と伝承文学研究とが、互いの領分を侵すことなく手を差し伸べ合うという、学際的研究あるいは相互協力の延長線上に、この実験授業を位置づけていただければ幸いである。

第１章　「実験授業・講演 in 愛教大」の実施に至るまで

人文社会科学振興プロジェクト（人社プロと略記する）において、「実験授業」という計画が持ち上がったのが2005年度末であった。そこで筆者は、2006年度の私の授業枠で、人社プロの出前授業を受け入れるつもりで話を進めようとした。しかしながら、愛知教育大学の教務課やさまざまな先生との話し合いの中で、１学期の１授業15コマの枠内で、ゲスト講義が３回を超えてしまうと、授業の単位認定主体がぼやけてしまいよろしくないという意見が上がった。そこで、本学国語教育講座、幼児教育講座、学校教育講座、外国語教育講座の先生方に「実験授業」の主旨を説明して協力を仰ぎ、人社プロの先生方の出前型授業を、自らの授業枠で１、２回受け入れて下さる「愛知教育大学における実験授業支援グループ」を組織する運びとなった。そのメンバーは、横山信幸教授（国語教育講座）をはじめ、新井美保子助教授（幼児教育講座）、有働裕教授（国語教育講座）、小川英彦助教授（幼児教育講座）、瀬田祐輔講師（学校教育講座）、中田敏夫教授（国語教育講座）、村岡眞澄教授（幼児教育講座）、山口雅史教授（幼児教育講座、2006年３月末に退職）と筆者大野寿子（外国語教育講座）の合計９名である[2]。支援グループの先生方には、それぞれの授業の数コマを、一面識もない人社プロ教員の出前型授業に、学生のためならばと快く提供していただいた。この場を借りて深く御礼申し上げる。また、人社プロの先生方11名には、お世辞にもアクセスがよいとは言えない所に位置する愛知教育大学に、謝礼なしでも快くお出ましいただいた。同じくこの場を借りて、心より御礼申し上げる。

ところで、大学の正規授業に人社プロのメンバーが、いわば客員講師として出向くわけであるから、実験授業受講者としてもともとの授業受講者を確保できる。しかしながら、学内外を問わず、できるだけ多くの人にも「実験授業」に足を運んでもらうため、ポスターやチラシを作成し、下記のような文言を添えた。

将来、幼稚園で絵本の読み聞かせをするかもしれない人が、
将来、小学校国語の授業で昔話の授業をするかもしれない人が、
将来、親となって子どもに童話を読んで聞かせるかもしれない人が、
子どもの奇想天外な質問に「豊かに」答え「豊かに」語るためのマメ知識を提供するプロジェクトです。
このテーマに興味のある方は皆さん是非ご参加下さい。

ご協力いただいた人社プロの先生方の授業スケジュールと、受け入れ授業を提供してくれた先生方は、以下のとおりである。

この受け入れ体制は、まず、愛教大にお

人社プロ（授業実施日）		愛教大（提供授業枠）　―すべて敬称略―
1．小長谷有紀（2006.06.08）	→	有働祐（国語記教育講座）前期木曜３限
2．斎藤君子（2006.06.08）	→	小川英彦（幼児教育講座）前期木曜４限
3．赤羽根有里子（2006.06.26）	→	大野寿子（外国語教育講座）前期月曜３限
4．加藤康子（2006.07.10.）	→	大野寿子（外国語教育講座）前期月曜３限
5．塚崎今日子（2006.07.27.）	→	新井美保子（幼児教育講座）前期木曜２限
6．齊藤純（2006.11.10.）	→	横山信幸（国語教育講座）後期金曜４限
7．阿部紀子（2006.11.20.）	→	大野寿子（外国語教育講座）後期月曜４限
8．真鍋祐子（2006.12.01.）	→	新井美保子（幼児教育講座）後期金曜３限
9．美濃部京子（2006.12.11.）	→	大野寿子（外国語教育講座）後期月曜４限
10．長崎広子（2006.12.14.）	→	横山信幸（国語教育講座）後期木曜４限
11．三原幸久（2007.01.15.）	→	大野寿子（外国語教育講座）後期月曜４限

ける実験授業支援グループの先生方に、「前期／後期：○曜○限」という形で授業枠をご提供いただいた。その情報を人社プロの先生方に伝え、都合のよい時間帯、曜日、日にちを複数選んでいただき、それぞれの実験授業のテーマや受講学生の所属等を考慮しつつ、世話役である筆者が日程調整を行った。愛教大受け入れ側の教員名に不均衡がみられるのは、授業枠をご提供いただきながらも、人社プロ側の先生方との日程が合わず、授業の出前が実現しなかった先生方もいらっしゃるためである。

受け入れ校である愛知教育大学には、教員養成系の課程、すなわち教員免許取得が卒業条件となる課程と、教員免許取得が義務ではない学芸四課程[3]とがある。支援グループにおいては、世話役である大野以外の教員は全員、教員養成課程の所属であった。愛教大における実験授業の実施は、教科によってはなかなか接することのない、教員養成課程と学芸課程の教員同士、異講座間の教員同士の連携が図られた意味でも、大変意義深いことであったと思われる。以下、第２章で全体的な考察、第３章では個々の授業別の考察を行い、最後に、「実験授業・講演 in 愛教大」の成果を総括する[4]。

第２章　実験授業総合報告――アンケート結果をてがかりに――

「実験授業・講演 in 愛教大」においては上述のとおり、人社プロ「伝承の現場からの考察」グループの先生方を11名お招きし、それぞれの専門分野に応じた授業を実施していただいた。また、受講生には、受講後にアンケートに協力していただいた。そのアンケート内容は、右のとおりである。

無記名型のアンケートではあるが、性別と学年（教員や学外者はだいたいの年齢）を記入する箇所を設けている。さらに、選択方式と自由記述方式を両方採用し、受講生の率直な感想や意見を聴取することができたように思う。実験授業11回全体を通したアンケート回収総数は、のべ488枚である。その内訳は、男性は108名、女性363名（不明17名）であった。また、学年別では、１年生88名、２年生140名、３年生202名、４年生42名、その他が16名であった。この「その他」には、提供授業の担当教員の回答や、学外のストーリーテリングの活動をしている方々の回答が含まれている。第２章では、このアンケートの集計と総合分析を設問順に行うこととする。

2006年度愛知教育大学での実験授業の実施とアンケート集計は、同大学国際理解教育課程国際文化コース欧米文化履修モデルの大野寿子ゼミの４年生（2006年度）７名 の協力なしには成り立たなかった。この場を借りて深く御礼申し上げる[5]。

人文社会科学振興プロジェクト「伝承の現場からの考察」グループ実験授業・講演 in 愛教大
アンケート

記入者性別：♂　♀　　所属と学年（学生の場合）　　年生
職業とだいたいの年齢（学生でない場合）＿＿十代

本日の授業・講演について
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？面白かったですか？
1)はい　2)いいえ　3)どちらでもない
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？
1)はい　2)いいえ　3)どちらでもない
3. 本日の授業・講演の面白かった点、印象に残った点、もっと知りたくなった点を具体的に書いてください。
4. 本日の授業・講演のつまらなかった点を具体的に書いてください。

伝承文学（昔話、神話、伝説、童話、絵本など…）の語りや読み聞かせについて
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？　1)はい　2)いいえ
6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？　1)はい　2)いいえ
7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？
1)はい　2)いいえ　3)どちらともいえない
8. 子どもの頃読んだり聞いたりしたお話で、印象深かった話、面白かった話を教えてください。
9. 絵本や昔話を子どもに読み聞かせたり語って聞かせたりするときに、注意しなければならない点は何だと思いますか？
10. この授業・講演の内容が、絵本や昔話の読み聞かせに役立つと思われる点を教えてください。

１．本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？　おもしろかったですか？

・はい……409人
　（男性85人、女性310人、不明14人）
・いいえ……９人
　（男性４人、女性５人、不明０人）
・どちらでもない……50人
　（男性14人、女性34人、不明２人）
・無回答……20人
　（男性５人、女性14人、不明１人）

このように、ほとんどの受講生が、実験授業の内容を「おもしろかった」と感じていることが見てとれる。

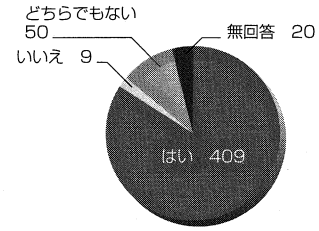
２．本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？

・はい……343人
　（男性60人、女性271人、不明12人）
・いいえ……24人
　（男性９人、女性15人）
・どちらでもない……97人
　（男性34人、女性59人、不明４人）
・無回答……24人
　（男性５人、女性18人、不明１人）

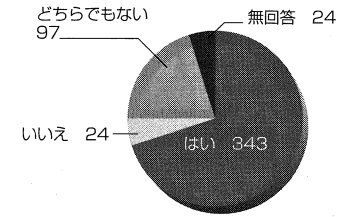
もう１度受講したいかという設問に対して、「はい」と答えた受講生は、70％であり、設問１の「おもしろかった」という回答率84％からは少し割合が減少してはいる。これは、「このような昔話の謎を解くようなタイプの授業をまた受けたいか」という意味の設問設定だったのだが、「全く同じ授業をもう１度受講したいか」と誤解した受講生が多数存在したためであり、世話役である筆者の設問に、ことば足らずな部分があったことは否めない。この場を借りて御詫び申し上げる。

３．本日の授業・講演のおもしろかった点、

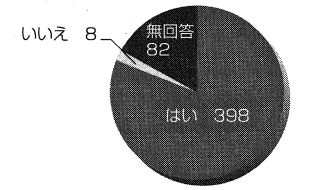
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



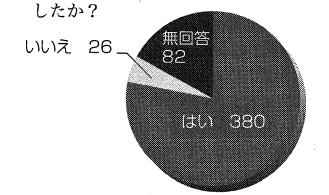
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？（前期・後期の集計）



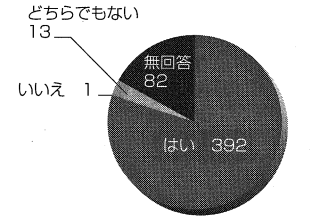
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



印象に残った点、もっと知りたくなった点を具体的に書いて下さい。

設問３に関しては、第２章の個別分析で詳しく述べることにする。

４．本日の授業・講演のつまらなかった点を具体的に書いて下さい。

設問４に関しては、第２章の個別分析で詳しく述べることにする。

５．子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？

・はい……398人
　（男性89人、女性296人、不明13人）
・いいえ……８人
　（男性６人、女性１人、不明１人）
・無回答……82人
　（男性13人、女性66人、不明３人）

全体の81％の受講生が、絵本や昔話を子どもの頃読んだと回答している。これは、男性の受講者総数108名中の約82.4％、女性の受講者総数363名中の81.5％と、男女ともほぼ同じ割合であるが、若干男性の割合が高いことが見てとれる。無回答の理由を口頭で説明してくれた受講生もいたのだが、この「子どもの頃」が何歳くらいをさすのかがよくわからなかったという意見もあった。幼稚園あるいは小学校低学年などと、もう少し年齢範囲を区切った方が、より正確な回答が得られたであろうと、反省している。

６．子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？

・はい……380人
　（男性81人、女性288人、不明11人）
・いいえ……26人
　（男性14人、女性９人、不明３人）
・無回答……82人
　（男性13人、女性66人、不明３人）

設問５で、昔話や絵本を自分で読んだのが81％であったのに対し、設問６で、大人に読んでもらったと答えた受講者は78％と、割合が３％下がっている。ここで気になるのは、設問５で、自分で読まなかったと答えた受講者が２％であったのに対し、読んでもらわなかったとの回答は５％で、こちらが３％上昇していることである。この数字の推移は、自分では読んだが読んではもらわなかったという受講者が、全体の３％いるということを指し示す。読んでもらえなかったのか、それとも読んでもらうことを自ら拒んだのかは、このアンケートからは残念ながら読みとることができない。

７．自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？

・はい……392人
　（男性89人、女性291人、不明12人）
・いいえ……１人
　（男性１人、女性０人、不明０人）
・どちらでもない……13人
　（男性５人、女性６人、不明２人）
・無回答……82人
　（男性13人、女性66人、不明３人）

「はい」と答えた受講生は約80％であり、この肯定的回答は、上記の、「子どもの頃絵本や昔話を自分で読んだ」と答えた81％、「子どもの頃、絵本や昔話を読んでもらった」と答えた78％とほぼ同じくらいの数である。このことから、子どもの頃、絵本や昔話を読んだ者あるいは読んでもらった者のほとんどが、自分もまた、子どもに読んで聞かせようと考えるのではないか、すなわち、プラスの因果関係があるのではないかと思われる。ところが、「子どもの頃に絵本や昔話を読まなかった」受講生が８名、「読んでもらわなかった」受講生が26名いた。それに対し、「自分が読んで聞かせることなない」と答えた受講生は１名であった。ここで言えるのは、自分が読んでもらわなかったから、自分も子どもに読んであげることはないというマイナスの因果関係は、少なくともこのアンケート上では読みとれないということである。もちろん、「どちらでもない」あるいは「無回答」の中には、「読んで聞かせてあげないかもしれない」という微妙な考えもあるだろうが、少なくとも、「読まない」という断言がごく少数に留まったところが幸いであった。ただし、このアンケートでの１/488名ということは、約500名に１人が、「子どもに昔話を読んで聞かせたくない」と思っていることを物語っており、その理由をも問う、別の角度からのアンケートや分析が、今後必要であろう。

８．子どもの頃読んだり聞いたりしたお話で、印象深かった話、おもしろかった話を教えて下さい。

この設問は自由記述（複数回答可）であったため、かなりの数になった。そのデータを次頁に指し示す。

全講演会を通じ、１位は『ぐりとぐら』であり、その次に、『シンデレラ』や『白雪姫』、『桃太郎』や『浦島太郎』など日本昔話が続いている。また、『ノンタン』シリーズも人気があることがわかる。アンケート回答者は、そのほとんどが18～22歳の学生たちであり、このようなアンケートを、また別の世代を対象に実施してみると、興味深い結果が得られるのではないかと思われる。さらに、グリム童話（白雪姫／赤ずきん／ヘンゼルとグレーテル／オオカミと七匹のヤギ／ブレーメンの音楽隊／かえるの王子様）だけで43票、アンデルセン童話（人魚姫／親指姫／マッチ売りの少女／みにくいあひるの子／裸の王様／赤い靴）で21票獲得している。イソップ童話（金の斧／北風と太陽／ウサギとカメ）では４票、ペローの童話（シンデレラ／眠れる森の美女）では２票獲得している。また、日本昔話（浦島太郎／カチカチ山／桃太郎／猿蟹合戦／わらしべ長者／花さかじいさん／かさ地蔵／一寸法師／力太郎／泣いた赤鬼／鶴の恩返し／金太郎／ぶんぶく茶釜／かぐや姫）では、61票獲得している。ここに挙げられた絵本、昔話、物語を、欧米のものと日本のものとに便宜上分けて考えると、その二つの間に統計上での開きがほとんど見られない。たとえば「ヘンゼルとグレーテル」を彼らが、グリム童話であるという認識のもと、あるいはドイツのお話であるという認識のもとに、読んだり聞いたりしたとは限らない。また、読む立場、あるいは読み聞かせを聞く立場の子どもたちが、どの国のお話かを正確に認識していたとは限らない。しかしながらこの統計結果は、受講生たちが幼い頃、日本だけではなく、外国の物語・作品にも同様に親しんでいたことを示している。結果的にそれが、今でも印象に残っているということが肝心なのである。また、ディズニー映画・アニメやTV（「日本むかしばなし」、「世界名作劇場」等）で放映されていた作品（たとえば、白雪姫、シンデレラ、ピーターパン、ピノキオ、小公女、フランダースの犬等）は、特に印象に残りやすいのではないかと思われる。すなわち、現在の大学生くらいの世代にとって、「読み聞かせ」と「テレビ視聴」とが、想い出の中で混在しているという可能性を、認識しておく必要がある

タイトル	票数
グリとグラ	31
白雪姫	22
シンデレラ	20
桃太郎	16
浦島太郎	15
赤ずきん	11
かちかち山	11
のんたんシリーズ	11
グリム童話	10
親指姫	10
人魚姫	10
ヘンゼルとグレーテル	9
日本昔話	9
一寸法師	8
はらぺこあおむし	8
三匹のこぶた	7
おむすびころりん	7
100万回生きた猫	7
ジャックと豆の木	7
かさ地蔵	6
いやいやえん	6
11匹のねこ　シリーズ	6
ねずみ君のチョッキ	6
となりの席のますだくん	6
鶴の恩返し	6
ちびくろサンボ	6
ピーターパン	5
アンデルセン童話	5
スイミー	5
エルマーの冒険	5
オオカミと七匹のヤギ	5
マッチ売りの少女	5
うりこ姫	5
イソップ童話	5
手袋を買いに	5
エルマーと竜	5
かぐや姫（竹取物語）	4
ころころ丸パン（パンが転がる話？）	4
オズの魔法使い	4
カラスのパン屋さん	4
眠れる森の美女	4
ウサギとカメ	4
三枚のお札	4
ぶんぶく茶がま	4
みにくいアヒルの子	4
ブレーメンの音楽隊	4
ピノキオ	4
花さかじいさん	4
フランダースの犬	4
不思議の国のアリス	4
幸福の王子	4
おたまじゃくしのひゃくいっちゃん	4
猿蟹合戦	4
101回死んだ猫	3
泣いた赤鬼	3
こぶとりじいさん	3
モチモチの木	3
ばばばあちゃん	3
大きなかぶ	3
赤い靴	3
おふろだーいすき！	3
こんとあき	3
ごんぎつね	3
モモ	3
番長皿屋敷	2
バッタ君のお散歩	2
小公女	2
白いうさぎと黒いうさぎ	2
ピーマンマン（Pマン）	2
うさこちゃん	2
北風と太陽	2
めっきらもっきらどおんどん	2
ブリ・ブラ・ブル	2
大きな木	2
ナルニア国物語	2
モケラモケラ	2
シートン動物記	2
マイケルどこへ行ったの？	2
かわいそうなゾウ	2
てぶくろ	2
王様の耳はロバの耳	2
十二支の話	2
こぐまちゃん　シリーズ	2
すてきな三人組	2
力太郎	2
金太郎	2
青い鳥	2
さっちゃんの魔法の手	2
家にある掃除機が実はゾウだったという話	2
はらぺこガズラー	1
羅生門	1
ほしをつくったケンちゃん	1
ムンジャモンジャは毛虫じゃない	1
パンをやくのはだあれ	1
わごむはどこまでのびるの	1
おばけのトッケビ	1
どうぞのイス	1
めめめんたま	1
めがねうさぎ　シリーズ	1
赤いろうそくと人魚	1
孫悟空	1
バーバパパ	1
三つの願い	1
裸の王様	1
4つの素敵なクリスマス	1
セロ弾きのゴージュ	1
ちいちゃんの影送り	1
キャベツ君	1
こいぬのチップ	1
10匹のねずみ	1
ティモシーとサラ　シリーズ	1
入郎	1
パンの話	1
ハーメルンの笛吹き	1
初めてのおつかい	1
星の話	1
ムッシュムニエルをご紹介します	1
ももいろのクレヨン	1
勇敢な10人の兄弟	1
雪山の寒古島	1
夢食い小人	1
よだかの星	1
ロボットカミィ	1
注文の多い料理店	1
はちかづき姫	1
ムーミン谷シリーズ	1
ライオンみどりのにちようび	1
ももいろのきりん	1
ルドルフといっぱいあってな	1
スーホの白い馬	1
三年寝太郎	1
青ひげ	1
ひめことおに	1
アリとキリギリス	1
雪女	1
舌切りスズメ	1
赤おに青おに	1
ライオンキング	1
赤太郎	1
ディズニー　シリーズ	1
ドリトル先生	1
うんちの話	1
うさぎのくれたバレエシューズ	1
エミールくん頑張る	1
スキャリーおじさんの絵本シリーズ	1
きこりさんのすてきなおうち	1
まー君ちの大きな木	1
たんたんハンカチ	1
カメラちゃんシリーズ	1
ネバーエンディングストーリー	1
大きな大きなおいも	1
鍵ばあさん	1
どろぼう学校	1
フレデリック	1
こまったさんシリーズ	1
犬とお母さんとライオンの話	1
犬が水面に写る自分がくわえた肉を取ろうとして、肉を落としてしまう話	1
たぬきの糸車？	1
ブルーノはおかんむり	1
ヘレンケラー	1
放課後の時間割	1
星と伝説	1
若草物語	1
わらしべ長者	1
出版社に勤める知り合いが作ってくれた本1	1
父親が語ってくれた昔話2	1
二匹のねずみ	1
ティモとチェルシー	1
金の斧	1
キリスト教復活祭の話	1
宝島	1
アンパンマン	1
ダンゴをなくしたおばあさん	1
ピーターラビット	1
星になった王子様	1
おてがみ	1
かえるの王子様	1
きいろのバケツ	1
算数が全然できない子の話	1
シンバの幼稚園	1
弁慶	1
アンナの赤いオーバー	1
石うすの話	1
王子とこじき	1
おかえし	1
くまの子フーウ	1
キツネとウサギ	1
ねずみのすもう	1
10人の子供	1

［その他］
- 絵本に登場する登場人物の名前が、自分や家族、友達の名前になっているもの。
- 「むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがいました。お終い。」という意表をつく話。

注）タイトルには一部誤りもあるようだが、回答どおりに記している。

ということである。いずれにせよ、メディアの影響が大きいことがわかる。また、小学校国語の教科書に掲載されている作品（モチモチの木、スイミー、ちいちゃんの影送り、ごんぎつね）も挙がっていることは大変興味深い。学校教育の中でとり上げられる作品はこのように、後に印象に残っているケースが多いので、教科書に掲載される作品の選択とその教授法が、大変重要なのである。

９．絵本や昔話を子どもに読み聞かせたり語って聞かせたりするときに、注意しなければならない点は何だと思いますか？

設問９に関しては、第２章の個別考察を経て、最後に総括する。

10．この授業・講演の内容が、絵本や昔話の読み聞かせに役立つと思われる点を教えて下さい。

設問10に関しては、第２章の個別考察を経て、最後に総括する。

第３章　実験授業個別報告 ── アンケート結果をてがかりに ──

第３章では、11名の先生方それぞれの実験授業の実施成果について、アンケート結果の分析をてがかりに、授業毎に報告および分析してゆく。なお、紹介するアンケート回答はほぼ原文どおりに挙げてゆく。

第１節　モンゴルの遊牧文化と口承文芸

国立民俗学博物館教授小長谷有紀氏による実験授業「モンゴルの遊牧文化と口承文芸」は、愛知教育大学2006年度前期木曜３限、国語教育を専攻する１年次学生を対象とした授業「国語科研究ＡⅡ」の枠内で、担当教員である国語教育講座有働裕教授の

協力のもと、2006年６月８日木曜３限（13:20〜14:50）に、同大学第二共通棟412教室にて開催された。受講者は、世話役である私とアシスタントの学生を含め、71名であった。

小長谷氏の実験授業では、モンゴル遊牧民の生活文化について、氏のフィールドワークによる貴重な映像資料を用いてご説明いただいた。広大で美しい高原、ゲルでの生活風景、そして現地生活で避けては通れない家畜の屠殺など、自然とともに生きるモンゴル遊牧民の生きざまを、貴重な映像と巧みな話術で、目に耳にじっくり焼きつけていただいた。このような文化背景をふまえた上で、授業の第２部とも言える、現地の言霊思想、すなわち、「ことば」の持つ「力」について、そして「ことばの文化」と「生活」との密接な関わりについての説明が展開されたのである。その結果、アンケート回答では、「ことばの力」に関する感想を述べるものが大変多かった。

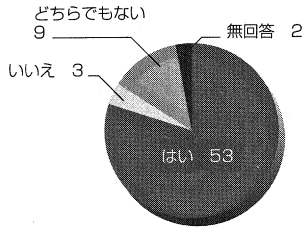
本講演を「おもしろかった」と答えた受講生は回答総数67名中53名、全体の80％であった（設問１）。この授業をもっと聴いてみたいか（設問２）となると、この割合が66％（44名）に下がる。その理由を、「おもしろくなかった点」（設問４）の自由記述に探ってみると、羊の話や屠殺後の肉塊が、学生の言葉を借りれば「グロすぎた」ようである。受講生は１年生で、しかも女性が多かったので、少々刺激が強すぎた感もあり、その点が残念ながら「おもしろくない」という表現をさせてしまったように思われる。しかしながら、もし受講生の大半が３、４年生だったら結果は違っていたであろうことを考えると、この回答は、授業の魅力を損なうものではない。

「おもしろかった点、印象に残った点、もっと知りたくなった点」（設問３）としては、総括すると、「モンゴルの文化を垣間見ることができた」ことが多く挙げられている。特に、国語教育専攻の学生だったからか、「ことば」に深い関心を示し、「ことばの大切さ」を改めて感じとった受講生が多かったようである。たとえば、「〈草が喉に詰まって死んだ〉など、死んだ動物に嘘をつくのがおもしろい」（人社〈国語〉１年女性）[6]、「ことばが、悪いことに知らないふりをするために使用される点や、家畜をだますために使用する点（がおもしろかった）」（人社１年女性）、「マイナスのことがあったら、プラスのことを言って安心させること（がおもしろかった）」（人社１年女性）などである。このような個々のトピックに関する感想は、「ことばの持つ力を考えさせられた」（国際３年男性）、「ことばによって、事実は変えられないけれど、気持ちは変えられるということを改めて感じました」（中英１年女性）という、ことばの普遍的価値と可能性にも言及するものへとつながっている。感銘に近いこのような意見は、小長谷氏の「嘘が言えるのがことばの本質」という名言に拠るところ大である。

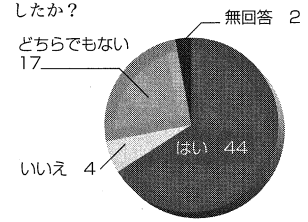
それにしても、「おもしろくなかった点」で多く挙がっていたのは、「スライドが多かった」という点であり、学生たちが多大な興味を示したのは、「ことばの持つ力」に関してであったことは意外であった。しかしながら、もし、映像資料が全くなかったとしたら、「もっと写真が見たかった」という意見も当然挙がっていたであろう。講演での映像資料の分量や、話とのバランスはなかなか難しいものではあるが、これは同時に、現代の伝承形態の一つである「絵本」の読み聞かせの際に、「挿絵」の与えすぎによる教育的効果、特に想像力育成の阻害にもつながる重要な問題をはらんでいるとも言えるのではないか。とはいえ、小長谷氏のスライドは、実際「多すぎた」わけでは決してない。「国語科研究ＡⅡ」の受講生以外の学生や教員、学外受講者などからは、「スライドがもっと見たかった」、「種オスの棒をまたぐ儀式、人間の結婚に棒をまたぐという文化について、もっと詳しく知りたかった」（国際４年女性）という感想も挙がっている。あくまでも、授業提供のあった「国語科研究ＡⅡ」の一環として狭義に考えると、受講生たちは、「映像資料」よりも「ことば」により大きな関心を示していたということなのである。講演の本来のテーマであった、モンゴル遊牧文化や伝承文芸の枠をはるかに越え、自国の文化や、自分たちにとって身近なことばをも真剣に考えようとする受講者たち、すなわち、国語教育を目指す若いエネルギーにこうして触れてみると、愛知県の、いや日本の国語教育の将来に、安堵と期待を感じずにはいられない。

このような授業を受講した上で、「この授業が絵本や昔話の読み聞かせに役に立つ点」（設問10）を、受講生に考えてもらった。その中で、参考になるコメントを挙げる。「言霊思想などの内容で、言葉遣いや相手を思った言葉のかけ方などを、子どもに伝えることができると思います」（障害１年女性）、「ことばを大切に扱うべきだということ。その上で、子どもに良い本を読んであげたい、感情を込めて読み聞かせたいと思った」（人社１年女性）。絵本の読み聞かせを広義にとらえ、子どもに対し、ことばを教えるという広い枠組みからの意見が目立つ。また、「子どもが、絵本や昔話のなかの一つ一つの言葉に対して、私たちが感

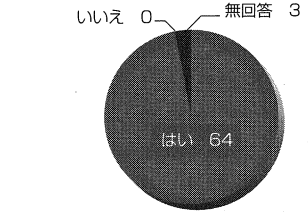
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



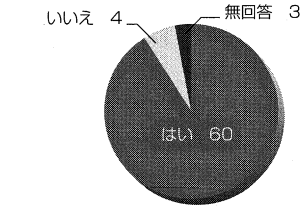
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



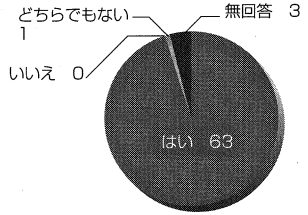
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



じている以上に、強い印象や影響を受けるということを理解しておくこと、一つ一つの表現も、語り手の言い方によって全く変わってくるということを理解しておくこと（がわかった点が役に立つと思う）」（中英１年女性）という、語りのテクニックよりはむしろ、語るときの心構えに関する重要な指摘があった。さらに次のような意見も挙がった。「一つのことばに、どのような意味が込められているのか、祝いや呪いの言葉なのか、などを意識していかなければいけないと思いました。どのような状況時に、どの言葉を使うかで、中に込められている感情に違いが出てくるのだなと思いました。ことばによって、困難を乗り越えていくという点は、とてもおもしろく、読み聞かせに役立てていけると思いました」（国際４年女性）。なぜこの場面でこのことばが使われているのか、少なくとも読み手や語り手が、たとえ自分流ではあっても理解しておいた方がよいという意見は、物語の舞台となった文化事情やことばの深みに言及した小長谷氏の講演が、伝承に使用される「ことば」というものを改めて考える上で、非常に啓発的であったことを物語る。さらに、参加者の中で、ストーリーテリングの社会活動をしている学外の女性たちからは、「おはなしの背景にある社会や民族について、ものの考え方について知ること（は、読み聞かせに役に立つ）」（50代女性）という意見を頂戴した。異文化（モンゴル遊牧民族）に触れられたこと、さらに、ことばの広がりと深みに関する再認識が、読み聞かせだけでなく、子どもにことばを教えるときの心構えとして、間接的かつ発展的に寄与しうるということが、本授業のアンケート回答の分析により、明白となったのではないか。

最後に、本講演の受講者が、「絵本の読み聞かせにおいて気をつけなければならない点」（設問９）について回答しているので補足しておく。多かった意見は、「大人の意見や考えを押しつけない（こと）。子どもの想像力を崩さないこと」（中社３年女性）、「おもしろい場面などは、自分も楽しみながら聞かせる（こと）（中国１年女性）、「絵本の内容について、読み聞かせた後に、感想を聞いたり、不思議に思ったことについて、一緒に考え、話すとよいと思う」（国際４年女性）などである。このような意見を総合すると、「読み聞かせ」という行為が、読み手から聴き手への一方通行であってはならないこと、伝承の空間を形成すること自体が、読み手と聴き手の共同作業であり、聴き手（多くは子ども）にとって体験的であるべきであることを明示しているように思われる。

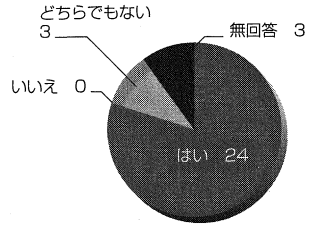
第２節　ロシア民話「おおきなかぶ」

ロシア口承文芸研究家・ロシア語翻訳家の斎藤君子氏による実験授業「ロシア民話〈おおきなかぶ〉」は、愛知教育大学2006年度前期木曜４限、幼児教育を専攻する２年次学生を対象とした授業「社会福祉学原論」の枠内で、授業担当教員である幼児教育講座小川英彦教授の協力のもと、2006年６月８日木曜４限（15:00～16:30）に、同大学第二共通棟412教室にて、小長谷氏の講演に引き続き行われた。参加者はアシスタントも含め38名であった。

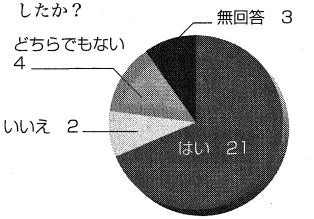
斎藤君子氏は本授業において、ロシア累積昔話や「大きなかぶ」の類話に触れながら、民話とロシアの風土との関わりから、「なぜ、かぶなのか」という謎を解いていかれた。また、「かぶの種を蒔く」という和訳では、「かぶのたった一つの種を［大切に］地面に置いた」という、最後の一粒であり大切なものであるというニュアンスが伝わってはいないそうである。ロシア語翻訳家ならではの観点が、本授業に凝縮されていたと言える。また、原語（ロシア語）での朗読テープを聴かせていただいたり、斎藤氏ご自身が、「大きなかぶ」を読み聞かせて下さったりと、昔話における繰り返し、そしてそこから生まれるリズムの大切さを説く内容であった。その結果であろうか。アンケートには、繰り返しの表現やリズムに関する回答が大変多かった。また、ロシアにおける呪術的なものに興味を示す回答も比較的多かった。

本講演を「おもしろかった、興味深かった」と答えた者は（設問１）、30名中24名で、全体の80％に上る。「もっと聞いてみたいか」（設問２）になると、上述の小長谷氏の講演と同様、「聞いてみたい」との回答率が70％（21名）と若干下がっている。このパーセンテージ減少の原因は、「本日の講演のつまらなかった点」（設問４）での自由記述に探ることができる。まず、「アファナーシュフやベッソーノフのことなどの話がきちんとわかっていないので、正しい解釈ができたか不安です」（初幼２年女性）という、自分の理解度に対する不安感が挙げられる。また、「ロシアの知識が〈寒い〉という程度で、ほとんど知らないことばかりなので、ロシアの民家の生活などを紹介してもらえるとよかった」（自然１年男性）という意見もあり、ロシアの文化的背景への関心の高さが浮彫となった。しかしながらこの点は、上述の小長谷氏の講演に対する感想の、「スライドが多すぎたのでは」という意見と対を成すものであろう。映像資料があればあるで、なければないで、それなりに短所となり長所となるのである

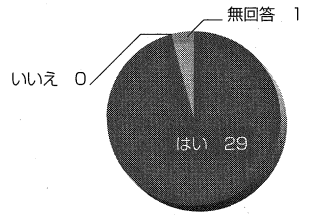
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



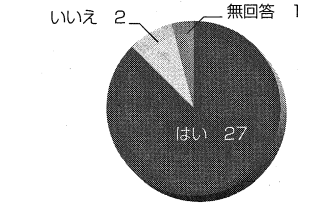
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



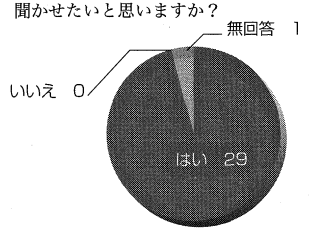
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



から、そのさじ加減はなかなか難しいものなのである。また、小長谷氏の受講生の大半は国語教育の学生であり、本授業の受講生は幼児教育がほとんどであったので、もともとの関心事にずれがあったという推論もまた可能であろう。

しかしながら、上述のような消極的な意見はごくごく少数であり、「おもしろかった、興味深かった」点（設問３）の自由記述の分量は、「おもしろくなかった」事に関する分量の３倍以上である。以下、例を挙げながら分析していく。記述の大半は、「累積昔話の鎖の構造がつながって、最後にきれるというのがおもしろかった。ロシア語と先生の訳のテンポのよさが印象に残った」（初幼２年女性）、「ロシア語で読んでいるテープを聴け、最後に斎藤先生も日本語で読んで下さったので、累積昔話に大切なリズムの比較もしやすかった」（初幼２年女性）という、テンポやリズムに関するものであった。斎藤氏が、「おじいさん」、「おばあさん」ではなく、登場人物の「カーチャ」に音を合わせて「じっちゃ」、「ばっちゃ」と訳された点が、特に絶賛されていた。さらに、「ただの昔話としか思っていなかったのに、そのお話には、国や時代のいろんな意味が込められている（残り物には呪力が宿る、かぶを引き抜くことの意味）ということが、印象に残りました。ロシア語の朗読が聴けたのがおもしろかったです」（初幼２年女性）という回答もあった。このように、昔話の深みに触れられたことへの歓喜、原語の朗読を聴くことの大切さを記しているものも多い。「ロシア語の全くわからない私でも、なんと言っているのかがすごくわかり、とてもおもしろかったです。リズム感があり、繰り返されるフレーズがとてもおもしろく、すぐに覚えてしまいそうでした」（初幼２年女性）。このような意見からは、やはりリズムの大切さをこちらも再認識させられた。また、「教材としての物語を、さらに広い観点（ロシア民話）から見れば、そこには新たな意味が見出されるということを具体的に教えていただいた」（教員60代男性）という、昔話の文化背景を知ることの大切さを実感した、愛教大教員からの貴重なご意見もあった。筆者はこの意見の奥に、昔話が教材のみに定着してしまうことへの危惧が感じとられるように思われる。

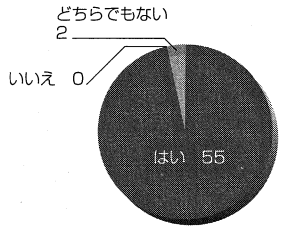
「この授業が絵本や昔話の読み聞かせに役に立つ点」（設問10）への回答は、「繰り返しの文〈ひいても、ひいても、びくともしない！〉を読む時に、最初はゆっくり読み、〈びくともしない〉ではやく読むというアドバイスが役立つと思った」（初幼２年女性）に代表される、リズムに関する実践的内容のものがほとんどであった。また、「どんなことでも、不思議に思ったことを深く調べることで、読み聞かせる人自身がその絵本の内容や背景を理解することができて、子どもと本の内容について話すことができると思いました。外国の絵本だと、原文のリズムを大切にして、作者が伝えたかったことをそのとおりに伝えるのも大切だと思いました。原語を知ることも大切なんだと思いました」（初幼２年女性）という回答も挙がった。読み聞かせる側の探究心の大切さ、リズムの大切さ、原文に触れることの大切さを訴える貴重な意見である。これらすべては、我々プロジェクトメンバーを喜ばせるものであったが、その極めつきは、次の意見であろう。「わたしは幼児教育で、これから子どもに読み聞かせる機会が多くなりますが、〈こういうものなんだよ〉と押しつけるのではなく、子どもがその話について、自由な発想で言葉が楽しめるようにすることが大事という話を聞いて、お話の雰囲気、リズム、内容のおもしろさが子どもたちに伝わるような工夫ができるようにがんばりたいと思いました」（初幼２年女性）。このような志を持った幼稚園教員が、一人でも二人でも多く世に出てくれれば、伝承の現場たる教育現場が、読み方のマニュアルという鎖から解放され、活気づいていくのではないだろうか。すなわち、伝承文学を伝えるという行為に、たった一つの正解があるわけではなく、そこには正解の幅が広がっているのであり、語り手は、自分の興味と知識に裏打ちされた、正解の幅から外れない範囲で、自由に生き生きと語ってもよいのである。少なくとも筆者はそのように感じた。

第３節　おばあさんはなぜ桃をたべたのか？　──「回春型」桃太郎の系譜──

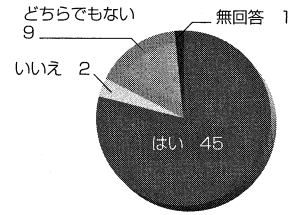
岡崎女子短期大学助教授赤羽根有里子氏による実験授業「おばあさんはなぜ桃をたべたのか？　──〈回春型〉桃太郎の系譜──」は、愛知教育大学2006年度前期月曜３限の、全学２年生を対象とした共通科目「国際社会と日本［展開１］」の枠内で、授業担当教員である筆者大野寿子（当時、外国語教育講座講師）の協力のもと、2006年６月26日月曜３限(13:20〜14:50)に、同大学第一共通棟206教室にて行われた。受講生はアシスタントも含め、67名であった。

まず、「桃から生まれた桃太郎」という「果生譚」がよく知られている「桃太郎」には、もう一つのヴァージョン「回春譚」、すなわち、「桃を食べて若返ったおばあさんと、それに欲情したおじいさんとの愛の結晶としての桃太郎」話が存在することが語られ

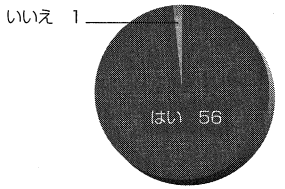
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



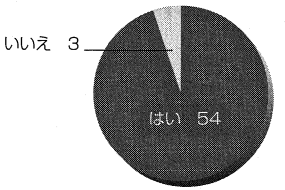
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



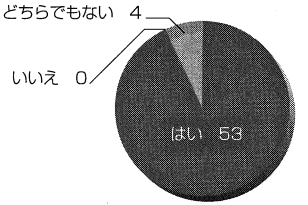
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



た。そして赤羽根氏は、「果生譚」の普及と、戦前戦中の軍国主義や英雄待望主義との関わり、および教育的配慮との関わりを、わかりやすく説いていかれた。なぜ桃なのか、そしてその桃は、現代の我々が目にするような果物だったのかということを、日本文化や大陸（中国、朝鮮）文化に表れる桃の象徴性と、さまざまな挿絵（江戸、明治）を駆使し、丹念にご説明下さった。受講者は、「回春譚」の存在に驚きを隠せないようであった。

赤羽根氏の授業を、「おもしろかった」と答えた学生は（設問１）、回答総数57名中55名、全体の96％というきわめて高い割合となった。「この講演をもっと聴きたいか」（設問２）では、「はい」という回答が78％（45名）であり、「どちらでもない」の16％（９名）が比較的目立つ結果となっている。「おもしろくなかった点」（設問４）の自由筆記では、「少し淡々としすぎていた」、「板書が多くもっと動画を見たかった」などの回答はあったものの、それはごく少数で、大半の生徒が無回答、もしくは「特になし」という記述であった。その証拠として、「おもしろかった点」に関する自由筆記（設問３）は、「おもしろくなかった点」の５倍以上の分量であり、ほとんどの学生がこの講演の内容に興味を示したことがうかがえる。

「おもしろかった点、興味深かった点」（設問３）に関しては、回春譚について初めて知っておもしろかったという内容が大変多かった。たとえば、「桃を食べておばあさんが若返ったという話は初めて知りました。自分の知っていた桃太郎とは少し違って驚く部分もありました。もっと、他にも昔話には裏の意味がありそうなので、それを聴いてみたいです」（初芸２年女性）という感想があった。

授業では、桃太郎のさまざまな類話について、貴重な挿絵等を提示しつつご説明いただいた。さらに、桃を食べることの含意をご説明いただいた結果、以下のような回答が寄せられた。「桃を食べるということは深い意味があるのだとわかってとてもおもしろかったです」（人社４年女性）、「桃太郎に込めた人々のメッセージの話のくだりがよかった。字画の話は全く想像していなかった事であったのでとても驚いた」（国際２年男性）。これは、桃という字は、「木」と「兆し」と書き、「妊娠を兆す木」という意が込められているという説明へのリアクションである。さらに「〈木＋兆〉。ゲルマン神話で〈人間は木から作られた〉というのがあり、偶然でも必然でもすごいと思った」（養護２年男性）という回答は、提供した大野担当の授業が、「魔女像の比較文化研究」をテーマとし、ゲルマン神話に関してすでに教授していたことにより得られた回答である。さらに、「魔女のときもそうだったが、ルーツに戻ってみると、意外な内容が含まれていて興味深かった。なぜ桃なのかをさまざまな視点から見ていて理解が深まった」（中数２年男性）というものもあった。このように、伝承文学研究を介した異文化相互理解の有用性が、彼らの回答から改めて実感できたように思われる。洋の東西を問わず、普遍的であるものに触れたとき、学生たちは「おもしろい」と思うのであり、そしてその「おもしろい」が、人に話さずにはいられなくさせるようである。実際、この裏話を人に話したという報告をたくさん受けている。それを語る相手はこの場合、友人や家族が多く、子どもに語って聞かせることとは少々異なるかもしれない。しかしながら、語る材料を持っているということはすなわち、「ネタが豊か」なことであり、その豊かさは、語る相手が大人であっても子どもであっても同様なのではないか。アンケート回答には、物語の裏側を知ることで、「実はね……」と子どもに語ったり、子どもからの質問に答えられるという意見が非常に多かった。やはり、物語の裏側を知って「おもしろい」と感じたからであろう【例：「なぜ桃から生まれたのかと子どもに聞かれたら、答えられる」】。また、「話の裏側を知っていると、自分もおもしろいと思うし、自分がおもしろいと思っていることが、読み聞かせの際に必ず声や表情に表れるはずなので、その気持ちが子どもに伝わるような気がする」という意見もあった。

このあたりは設問10の回答分析と重複してくる内容ではあるが、まず受講生たちは、自分が愉しむために、昔話の裏話をたくさん知りたいと思うようである。そして、それを人に話して「へえ！」と言ってもらうことに、ある種の快感を覚えるようであり、「へえ！」と言ってもらいたくて、裏話をもっと知りたくなるのだと言う。そして、ことばや表現は選ばなければならないとしても、自分が愉しいと思ったことは、きっと子どもをも愉しませるであろうから、やはり昔話の「裏側」をたくさん知りたいというのである。しかしながら、回春譚は、小さな子どもには伝えないほうがいいという意見もあった。それは、「日本の昔話（桃太郎果生譚）の教育的側面というものを実感した」という意見と、不即不離の関係にあるようである。

第４節　消えた頼光（らいこう）

梅花女子大学教授加藤康子氏による実験授業「消えた頼光」は、愛知教育大学2006年度前期月曜３限、全学２年生を対象とした共通科目「国際社会と日本［展開１］」の枠内で、授業担当教員である筆者大野寿子（当時、外国語教育講座講師）の協力のもと、2006年７月10日月曜３限（13:20〜14:50）に、同大学第一共通棟206教室にて行われた。受講生は70名であった。

加藤氏は、まず、「頼光」という今の若い世代にはなかなかなじみのない英雄伝説を説明され、その古い英雄像と新しい英雄像、あるいは東洋と西洋の英雄像の普遍性というものを明らかにされた。また、「頼光」や他の昔話の鬼退治の場面や「カチカチ山」の残酷な場面に触れ、残酷な場面をすべて排除することの是非を、受講者に考えさせる内容であった。その結果、残酷な場面が含まれる話が、平和な話に作り変えられる可能性もあるという認識、伝承や読み聞かせには、視覚による効果が大きいという認識、昔話の価値というものはさまざまであるが、まず「知る」ということが大切なのだという認識に至った受講生が大変多かった。

アンケート回答総数63名のうち、本授業が「興味深かった」（設問１）と答えた受講生は46名で、全体の73％に上る。その「おもしろかった点」（設問３）の多くが、「頼光と現代のヒーローものにある共通点」（中音２年男性）であるとの回答であった。これは、加藤氏が授業中に、「自分にとってのヒーロー（ヒロイン）を３名挙げよ」というアンケートを実施され、その結果を受け、日本古来の英雄と現代の英雄像との間の普遍性を説明して下さったからであろう。ここで、そのアンケート結果を報告する。

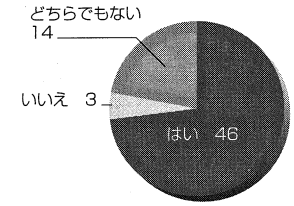
第１位に「アンパンマン」が挙げられて

ヒーロー・ヒロイン	備考	票数
アンパンマン	アニメ「それいけ！アンパンマン」	22票
ウルトラマン	特撮「ウルトラマン」	15票
セーラームーン	アニメ「美少女戦士セーラームーン」	14票
仮面ライダー	特撮「仮面ライダー」	9票
ジャンヌ・ダルク	フランス百年戦争時、軍を率いてイギリス軍を撃破した。	3票
スーパーマリオ	任天堂ゲーム「スーパーマリオ」シリーズ	3票
ドラえもん	アニメ「ドラえもん」	3票
中田英寿（ヒデ）	サッカー選手（日本）	3票
シンデレラ	ディズニーアニメ「シンデレラ」	3票
孫悟空	「西遊記」ではなくアニメ「ドラゴンボール」の方	2票
ジョニー・デップ	俳優（アメリカ）	2票
ナポレオン	フランスの皇帝	2票
イチロー	野球選手（日本）	2票
マイケル・ジョーダン	バスケットボール選手（アメリカ）	2票
ウルトラマン・セブン	特撮「ウルトラマン・セブン」	2票
マザー・テレサ	貧しい人々のために活動した修道女	2票
サリーちゃん	アニメ「魔法使いサリー」	2票
戦隊もの	○○○レンジャーなど	2票
舘ひろし	俳優（日本）	1票
キリスト	キリスト教の救世主	1票
赤ずきんちゃん	グリム童話あるいはペロー童話「赤ずきん」	1票
織田信長	戦国・安土時代の武将	1票
ミッキーマウス	ディズニーキャラクター	1票
ショクパンマン	アニメ「それいけ！アンパンマン」	1票
カレーパンマン	アニメ「それいけ！アンパンマン」	1票
養老孟司	作家（日本）	1票
ナウシカ	宮崎アニメ「ナウシカ」	1票
シータ	宮崎アニメ「天空の城ラピュタ」	1票
ジダン	サッカー選手（フランス）	1票
カウボーイビバップの主役	アニメ「カウボーイビバップ」	1票
王貞治	野球選手・監督（日本）	1票
アムロ・レイ	アニメ「機動戦士ガンダム」	1票
サブロー	野球選手（日本）	1票
リチャード1世	イングランド王	1票
ピーターパン	ディズニーアニメ「ピーターパン」	1票
杉原千畝	ビザを発給し、ナチスからユダヤ人を救った	1票
マッカーサー	アメリカ軍人。GHQ最高司令官。	1票
亘	アニメ映画「ブレイブストーリー」	1票
Cocco	歌手（日本）	1票
坂本龍馬	幕末の志士。大政奉還に尽力。	1票
東条英機	軍人・政治家。戦後、A級戦犯として絞首刑に。	1票
昭和天皇	在位1926～1989年。	1票
仮面ライダーV3	特撮「仮面ライダーV3」	1票
義経	平安末期の武将。	1票
ハリーポッター	本・映画「ハリーポッター」シリーズの主人公	1票
ロン・クラーク	アメリカ・英語教師	1票
ロナウジーニョ	サッカー選手（ブラジル）	1票
オリバー・カーン	サッカー選手（ドイツ）	1票
緑レンジャー	特撮戦隊もの	1票
白雪姫	ディズニーアニメ「白雪姫」or グリム童話「白雪姫」	1票
Gackt	歌手（日本）	1票
Hideki（未来）	？？？	1票
ジュウレンジャー	特撮「ジュウレンジャー」	1票
スーパーマン	ハリウッド映画「スーパーマン」	1票
ペコ	不二家のペコちゃんか？	1票
いとこの兄ちゃん		1票
少年漫画の主役全般		1票

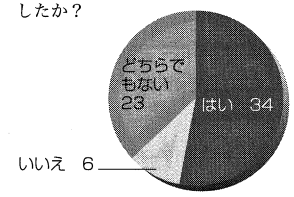
いる。「アンパンマン」が、男女ともに支持されたアニメであり、多くの人々にとって、弱いものを助け悪を倒すという理想のヒーロー像であることがわかる。第2位には「ウルトラマン」が、第3位には「セーラームーン」が挙げられた。それぞれが、男性にとってのヒーロー像、女性にとってのヒーロー（ヒロイン）像であるように感じられる。アニメや漫画などの主人公が多いような印象だが、歴史上の人物や現在活躍している実在の人物を挙げる人も多かった（全体では33票で、24人の人物が挙げられた）。そのような傾向は男性に多く見られ、サッカーやバスケットボール、野球などのスポーツ選手が多く挙げられていた（全体では14票で、9人の人物が挙げられた）。どんなヒーロー・ヒロインを挙げるのかは、育ってきた環境や興味のあるジャンル、打ち込んできたものなどで異なるようである。しかしながら、その差異こそが個性であり、大切なのだろう。

さて、授業アンケートに話を戻すが、本授業の「おもしろくなかった点」（設問4）で多く見られたのは、今まで「頼光」という人物に対してほとんど馴染みがなかったので、興味・関心が湧かなかったという意見だった。【例：「頼光という今日のメインの人について何も知らなかったから、興味を持てなかった」（国際2年女性）、「頼光になじみがなさすぎて、興味を持つのに時間がかかった」（養護2年女性）】この意見は、現在の若い世代が、自分たちの国の歴史、昔話や言い伝えをよく知らないことの表れであろう。しかしながら、関心がないのはむしろ、その対象について全く知らないからであり、多少の知識さえあれば、あるいは、身近なものとのつながりを見つけてあげれば、関心へとつながるものである。

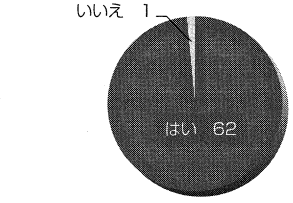
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



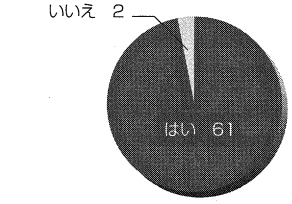
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



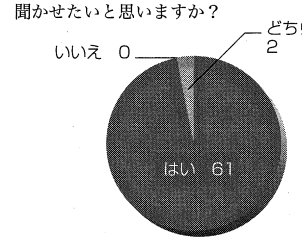
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



学生の感想の中には、「ハリーポッターなどと頼光の共通点を見つけようというような目的があればよかった」という積極的な意見も見られた。しかしながら、「おもしろくなかった」という意見は少数で、「おもしろかった」という意見の方が上回っているのは、上述のパーセンテージのとおりである。意見を分析すると、以下のようにまとめることができる。

・講演の前から、頼光について知っていた人はほとんどいなかったようだが、講演を聴いて『頼光一代記』をおもしろいと感じ、興味を持った人が多い。
・話題に挙がった『カチカチ山』の話がおもしろいと感じた人が多い。
・酒呑童子について興味を持ったという意見が多い（『酒呑童子絵巻』の物語を初めて知ったのでとてもおもしろかった）。
・資料（図版や実物の絵本など）がたくさん提示されたので、わかりやすかったという意見が多い。
・物語にはさまざまなパターンがあり、本来の物語には残酷な場面が含まれているという点に関心を抱いたという意見が多い。
・頼光などの日本の古典と、現代の海外ファンタジーやヒーローものの間に見られる共通点に驚いたという意見が多い。

特に、後半の「残酷性」について、そしてヒーローの「共通点」あるいは「普遍性」についての感想は、「この授業が読み聞かせに役に立つ点」（設問11）での自由筆記にも反映している。加藤氏の授業受講者のアンケートには、これ以外にも自由筆記が多かった。その意見を集約すると、まず、全く知らなかった日本の英雄譚「頼光」と、自分のこれまでの生活で身近に感じていたさまざまなヒーローとがつながることに素直に感動し、違う世代や異文化の英雄譚の共通性を楽しめるという可能性を指摘しているものが多い。これは、語り手、読み手の昔話や物語に関する知識の向上が、自分自身の思考を豊かにし、さらに、豊かな人間形成や教育につながるのではないかという期待すら感じさせるものである。【「頼光の物語の特徴が、現代のヒーローものやハリーポッターシリーズにも通じるところがあると知り、とても新しい発見をした気持ちになりました。仲間との絆、悪者退治というモチーフは昔から現代を通して人気があるものなんだと思いました」】

また、鬼の腕などが切られるシーンが話の中にあるという説明をうけて、「本来残酷なシーンが含まれる話を、平和な話に作り変えている部分があるということ（がわかった）」（中英２年女性）という感想が挙がった。さらに、「残酷な内容を知ってる上で、本が読めるようになったと思う」（環境２年女性）、「読み聞かせをする時に、リアルな本を選ぶか、モラルが残っている本を選ぶかを、その時に考えるということを学べました」（初幼１年女性）という実践性にもふれている。すなわち、目の前にある昔話や物語が、平和な話に書き変えられたという歴史性、あるいは細部（特に結論）が異なる話があるという類話の存在を知っていることが、目的に応じた（読み聞かせなどの）テキスト選びを可能にするというのであり、そのために、加藤氏の講演が有益だったというのである。彼らは、児童文学や絵本が相当数存在することを知っているし、いずれそれらを自ら子どものために選択しなければならないことを想定している。選択肢が多いからこそ、その中でどれを選ぶべきかというたった一つの正解ではなく、むしろ、目的や相手の年齢性別に応じた選択が、自分でできるようになることを望んでいるのである。特に、次に挙げる感想は、教育というものを真剣に考える学生ならではの、貴重な意見に思われる。「昔話に出てくる鬼のおどろおどろしさや、少し残酷かと思われがちなシーンを実際に絵で見ることができたこと（がよかった）。最近の絵本はかわいらしく鬼が描かれているものが多いですが、夢に出てくるくらいコワイ鬼の存在を、消さずに伝えていきたいと思います」（国際４年女性）。

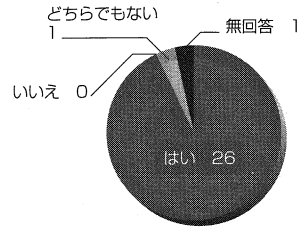
第５節　東スラヴの水の精ルサールカ

札幌大学助教授塚崎今日子氏による実験授業「東スラヴの水の精ルサールカ」は、愛知教育大学2006年度前期木曜２限、幼児教育を専攻する２年次学生を対象とした「保育内容研究・言葉Ａ」の枠内で、授業担当教員である幼児教育講座新井美保子助教授の協力のもと、2006年７月27日木曜２限（10:50〜12:20）に、同大学保健体育棟の幼児心理学実験室にて行われた。参加者は、アシスタントを含め35名であった。

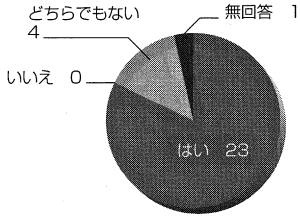
塚崎氏の授業は、我々にとってはディズニーやアンデルセンの人魚姫のイメージが強い「水の精」像について、特にロシア（東スラヴ）地域での「ルサールカ」という表象に的を絞り、その時代性や地域性を、さまざまな挿絵を通して説いていかれた。

本授業を受講して「興味深かった」（設問１）と答えた受講生は、回答総数28名中26名であり、92％に上る。この授業を「もっと聴いてみたいか」（設問２）では、「はい」という回答が82％（23名）であり、大変高い割合を保っている。その「おもしろかった点」（設問３）を総括すると、実際に、ルサールカの妖怪や精霊のような絵

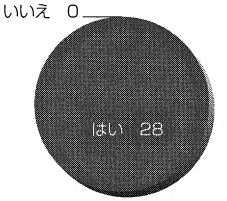
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



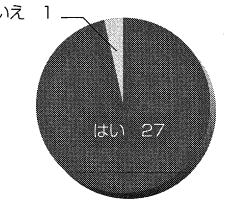
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



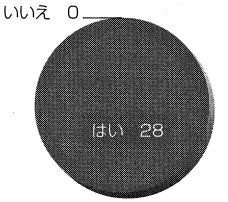
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



を多数見ることができた点、そして、そのさまざまなイメージから、ルサールカのイメージが徐々に変化していったと認識できた点につきるようである。ほとんどの受講生はまず、「水の精霊なのに、絵を見るととても恐かった」ことが印象に残ったようである。多くの学生が、「精霊と聞いてすごくキレイな感じを想像していたけど、プリントの絵が恐くてすごくびっくりした」（初幼２年女性）という類の回答を寄せている。さらに、「フォークロアの意味を初めて知りました」（初幼２年女性）と、伝承文学研究に興味を示す学生や、「ルサールカはなんとなく魔女像につながるものがあるなあと思いました」（国際４年男性）と、独自の考察を展開する学生もいた。【例：「もともとは醜い妖怪として伝えられていたものが、いつのまにか、かわいらしい、愛されるような存在へと移り変わっていったというところがおもしろかった」（国際４年女性）】また、「つまらなかった点」（設問４）への回答はごく少数ではあったが、「ロシアの地理はよくわかりません」（初幼２年女性）、「劇詩『ルサールカ』が生まれた背景のところがよくわからなかった」（初幼２年女性）という意見が多かった。これは、斎藤君子氏（おおきなかぶ）の授業アンケートと同様、物語やそれにまつわる不思議な存在が生まれた文化的背景に興味はあるものの、現代の若い世代には、ロシア（アメリカ以外の欧米諸国と言っても過言ではない）に関する基本的な情報が乏しいために、その想像と理解が大変困難であるという実情を物語っている。偶然ではあるが、斎藤君子氏の場合も塚原氏の場合も、受講者のほとんどが幼児教育を専攻する学生であった。このような意見を分析して、未来の幼稚園教員の想像力のためには、外国語学習という型にはまったかたちではなく、オーディオ教材やこのような昔話の裏話等を通じた、外国文化の体験型学習が必要なのではないだろうか。

「この講演が読み聞かせに役に立つと思う点」（設問10）については、ルサールカの多面的な姿を学んだことによる意見が目立った。「一つの事柄についてさまざまな見方やイメージができる」ことを学び、正解は一つではないのだという認識に達したこと、そして「話の背景を知ったこと」で、子どもの質問に柔軟に対応できるようになったと感じた受講生が多く、それが筆者には大変うれしかった。【例：「ルサールカなどの妖精が、どうして妖精になったのか、どういう格好なのかなど、子どもから質問が出そうなことの内容を、少しでも知ることができてよかった」（初幼２年女性）、「昔話の由来など知っておくと（子どもたちにはそれを伝えてもわからないだろうけど）、神秘的、興味深く語れると思うし、引き込むポイントがわかる」（初幼２年女性）、「一つのストーリーだけを伝えるのではなく、時代背景などをふまえながら子どもの年齢に応じて知識を広げさせることができる」（国際４年女性）】

本授業をふまえ、「読み聞かせで注意すべき点」（設問９）を聞いてみると、子どもの想像力をふくらませるような読み方をすること、子どものペースに合わせて読むこと、読む速さや、声の大きさ、高さなどに気をつけ、子どもの興味を引くように読むこと、という回答が多かった。また、話の内容を理解しておくことや、その話に関する知識を持つことも必要であるという回答も多く見られ、塚崎氏の講演で学んだことを、将来の幼稚園教員が、実践的に生かそうとしている意欲が感じられる。【例：「その内容をよく理解しておくこと。子どもの想像力が広がるようにすること」（初幼２年女性）、「一つのイメージを押しつけるのではなく、いろいろな面があるということを、イメージさせられるようにできればいいと思う」（国際４年女性）】子どもが話に入り込みやすいように読むという、テクニック的な側面を回答した学生も多かったが、その回答の端々に、「子どもが話に入り込みやすくするためには、自分がその話をよく理解していなければならない」といった心構えがうかがわれた。「昔話は謎や奥深さが残って、子どもがさらに興味を持つように語る」（初幼２年女性）ためには、自分がその謎や奥深さに興味を持ち、子どもと一緒に考えることも必要となる。そのためにはやはり、文化的背景、絵本や児童文学だけでなく、伝承文学や文化学の知識が必要なのではないだろうか。少なくとも受講生たちは、その必要性をおぼろげながら感じているように思われる。

ルサールカの表象には、若い女性であったり、妖怪じみたものであったり、さまざまあるものの、その本物を求めるのではなく、いかなる姿なのかを「想像する」あるいは「想像させる」こともまた重要なのである。この点は、先の加藤氏の授業アンケートに多かった、「視覚に訴えることも重要なのだ」という感想と相反する感想のようにも考えられる。しかし筆者にはむしろ、読み聞かせや語り聞かせに取り入れる「視覚的要素」のバランスや、目的や相手の年齢等に応じたバランスを考えるという、さじ加減の重要性が指摘されているように思われる。加藤氏の実験授業受講生と塚崎氏の受講生は、全く違う顔ぶれであり、このようなバランスの問題に気づいたのはむしろ、ほとんどの講演を補助してくれている（したがってほとんどの講演を聴講している）アシスタントの学生たちであった。

彼女たちの意見を集約すると次のようになる。

「視覚的に見せることも大切だが、時には絵を見せないで想像させることも重要である。また、『実はね……』と話の裏側を教えてしまうのも良いかもしれないが、子どもたちそれぞれに『何でだと思う？』などの問いかけをして、想像を膨らませてもらう……というのも大切なのではないだろうか。読み聞かせをする際には、こういったバランスも重要なのではないかと思った。ここまでの五つの講演を聞いて感じたことは、一概に読み聞かせには『これが良いんだ』ということが言えないのではないかということだ。」

視覚的要素のバランスや、物語の裏話を語るときのさじ加減の重要性を指摘している意見である。そしてこれらのバランスやさじ加減は、昔話の「裏」を知ることによって初めて可能となることを、付け加えておきたい。

第６節　桃太郎の神社と伝説 ── 近現代の文化遺産として ──

天理大学教授齊藤純氏による実験授業「桃太郎の神社と伝説 ── 近現代の文化遺産として ──」は、愛知教育大学2006年度後期金曜４限、国語教育を専攻する１年次学生を対象とした授業「国文学演習」の枠内で、授業担当教員である国語教育講座横山信幸教授の協力のもと、2006年11月10日金曜４限（15:00～16:30）に、同大学第一共通棟309教室にて行われた。受講者は41名であった。

本講義では、日本に三つ存在する「桃太郎」ゆかりの神社の中で、特に愛知県犬山

市にある桃太郎神社に焦点を当て、現地の地名と物語とを関連づけて、桃太郎神社の成立(例【雉】:木地屋→木地ヶ棚→雉ヶ棚)を考えるという、民俗学的視点からの考察のみならず、その建立、あるいはもともとあった神社の「桃太郎神社」への移行が、大正から昭和初期の商業資本主義と密接に関わるという社会学的考察が行われた。さらに、現代風に言えば、昔話を題材としたテーマパークの建設と、そこへの桃太郎の銅像建立とが、当時のいわゆるブームであったこと、そのような商業施設の立地には、必ず地元の鉄道会社の利益向上と関連があったこと、また、桃太郎の銅像建立にこだわった巌谷小波が、ベルリンにあるメルヒェン・ブルンネン（メルヒェンの泉）にあるグリム童話の登場人物たちの銅像を範としたことなどが、映像資料を用いて説明された。

齊藤純氏の授業内容を「興味深かった」と答えた受講生は、回答総数34名中67%(23名）であった。どちらでもないという回答が比較的多かったのである（18%、6名)。この原因としては、こちらで準備していたOHCが思ったより鮮明ではなく、「資料が少し見づらかった」と感じた学生が多数いたことが挙げられる（設問4)。これは当方の準備不行き届きであり、齊藤純氏にはこの場を借りて、心より御詫び申し上げる。

本講演の「おもしろかった点」(設問3）には、桃太郎の話が、地域の村おこしのために都合がよかったこと、地名が桃太郎の話と結びつけられたことが多く挙げられている。また、巌谷小波が桃太郎に執着し、ドイツの例を参考に銅像まで建てようとしたことに興味を持った学生が多かった。特にこのクラスは、自由記述の文章が比較的長いのが特徴的である。たとえば以下のような感想があった。

「桃太郎の地とするために、いろいろとこじつけているというのがおもしろかったです。また、大正の鉄道普及が各地の観光地の発達につながり、ひいては桃太郎の地としてしまおうと考えたというのも興味深かったです。神話から昔話への変遷についてもっと知りたくなりました」(人社1年女性)。「桃太郎神社に行ってみたいです。愛知出身だから、愛知のことをやってくれて楽しかった。あと、写真があってわかりやすくてよかった」(人社1年女性)。「さまざまな要素から桃太郎について考えられている点が興味深い。物語が商業主義と結びつけられているのに、改めて気づかされた」(中国1年男性)。

ほかならぬ愛知教育大学で、地元愛知県犬山市にある桃太郎神社の講演を聴くことができ、その成立のからくりに、これまた地元の名古屋鉄道が大きく関与しているとわかったことに、大変満足している意見が多かったようである。昭和初期のテーマパーク立地に、鉄道会社の乗車率が関わっていることを知り、現代日本のテーマパークの立地やそのスポンサーに、興味を持った学生も複数いた。

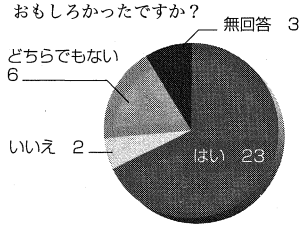
またこのクラスは、「浦島太郎」、「一寸法師」、「かちかち山」等の授業を前期に受けていたらしく、「桃太郎」と「桃太郎神社」、すなわち、伝承と社会との新しい関わり方を学び、伝承文学への興味が一層わいた学生が多いようである。そして、そのような基礎知識があるからこそ、「ドイツの風が日本の村に届いていたというまとめが印象的でした。知らないことを知るのはおもしろいです」(中国1年男性）というような、知識欲あふれる回答が目立つのであろう。

ちなみに、巌谷小波について知らないという回答は全くなく、この点は、受講生が国語教育専攻の学生だったことが、プラスに作用したと思われる。

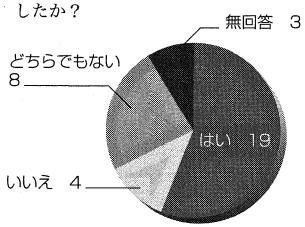
齊藤純氏の講演が、「読み聞かせに役に立つ点」(設問10）については、読み手となる大人が絵本や昔話に関する知識を深めることで、子どもの疑問によく答えられるだろうという意見が多く見られた。単に読んで聞かせるだけでなく、子どもとのコミュニケーションも深まると感じたようである。【例:「裏話のようなことを知っていると、読み聞かせた後にでもまた会話が弾みそうだ」(中国1年男性)、「なぜそのような物語が成立したのかということを考えることで、大人が物語をより理解できれば、子どもにも与える影響が違ってくると思う」(中国1年男性)】

ところが一方で、桃太郎神社の商業資本主義との関わりに関しては、現実的すぎて小さな子どもへの読み聞かせには生かせないという意見も見られた。それでも、小学校高学年や中・高生に対してはおもしろい話であり、知識になるのではないかと考えている学生も多い。【例:「小学校の中・高学年ならばこのような話もわかるかと思うが、低学年などの読み聞かせでは、現実的すぎて生かせないと思いました」(不明 女性)】しかしながら、このような意見から読みとれることは――ほとんどの受講生が初頭国語教育を専攻する学生であったことからであろうか――「読み聞かせ」の場として、彼らは、幼稚園での読み聞かせではなく、初等国語教育の朗読や授業現場を念頭に置いているということである。幼児教育専攻の学生が、幼稚園を念頭において回答してくれることを考えれば、「読み聞かせ」の別の現場を念頭にシミュレーション

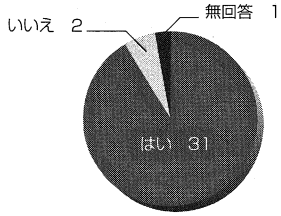
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



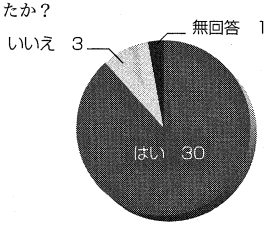
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



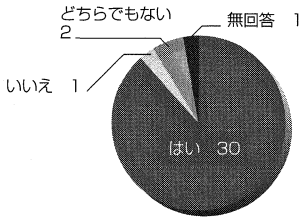
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



してくれる国語教育専攻の学生もまた、「伝承」の多層性に対応するための貴重な意見提供者である。

第７節　絵本は自分の目で選ぶ

愛知江南短期大学教授阿部紀子氏による実験授業「絵本は自分の目で選ぶ」は、愛知教育大学2006年度後期月曜４限、国際文化コース３年を対象とした専門科目「ヨーロッパ文学特論」の枠内で、授業担当教員である筆者大野寿子（当時、外国語教育講座講師）の協力のもと、2006年11月20日月曜４限（15:00～16:30）に、同大学第一共通棟203教室にて行われた。受講生は61名であった。

阿部氏の実験授業では、特にペローの「長靴をはいたネコ」を中心に、同じ話を扱ったさまざまな絵本の画風や描写のセンスから、画家や翻訳家の特性をあぶり出した。さらに、目的に応じていかなる絵本を選ぶべきか、絵本選びをいかに愉しむべきかといった、絵本選びの醍醐味に迫る内容であった。事前にペロー「長靴をはいたネコ」の和訳を読ませておいたことも功を奏し、受講者全員が、原作の知識を持った上で、絵本の挿絵の比較に集中できたように思われる。

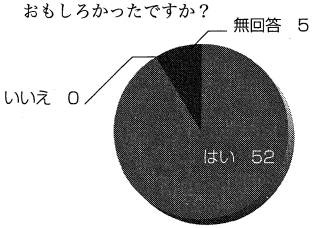
アンケート回答総数57名中、この授業が「おもしろかった」（設問１）と答えた受講生は、91％（52名）に上っている。また、「この授業をもっと聴いてみたいか」（設問２）への回答も、「はい」と答えた受講生が87％（50名）と大変高い割合を示している。

阿部氏の講演の「おもしろかった点」（設問３）の記述は大変多く、その中でも多数を占めた意見は、「長靴をはいたネコ」や「白雪姫」等、同じ話の絵本を何冊も実際に提示し、丁寧に比較された点がおもしろかったということである。さらに絵の比較については、緊迫した場面 で、緊迫感がきちんと描かれている絵本もあれば、そうではない絵本もあるということを実際にご提示いただいた。その見聞より受講生は、絵の描かれ方によって、その場面の緊張感が顕著に変化するということを実感し、絵本における絵の重要性を改めて認識できたようである。また、「絵本の絵の見方が変わった」という意見もあり、本講演が大変啓蒙的であったことが見てとれる。【例：「絵本はただ読むだけのものではないということがわかった。同じネコでも絵の印象で、話の印象がだいぶ異なってくるものなんだと思った」（国際３年女性）】「絵本の見方が変わった」きっかけは、「表紙や見返しからもうすでに愉しむことができる」こと、「原作では描かれていないが、ちょっとしたところにお話を膨らませるようなしゃれた仕掛けが描かれている」と学んだところにあるようだ。後者に関しては、原作を知っていなければ気づかないことであり、したがって、「原作」（ここではペローの「長靴をはいたネコ」）をあらかじめ読んでおくことの大切さを実感した意見もあった。【例：「絵本によって読み手の想像の範囲が狭くなったり、広くなったりすることが興味深かったです。」（国際３年女性）、「絵本を選ぶときのポイントなど、とても勉強になりました。余分なものをつけ足さずに、読者の想像をかき立てるイラストに込められた画家の意図を読みとるというのがとてもおもしろいと思います」（国際３年女性）、「自由に想像しても良いが、ベースからは外れてはいけないということ。絵によっては、子どもに読み聞かせるのに有効でないものもあるということ」（国際３年女性）】

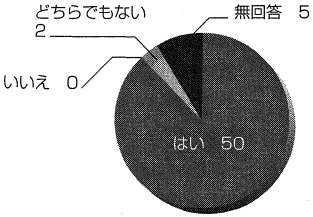
女性の受講者のみならず、男性受講者も、授業を受けて改めて、「絵本を読みたい」と思った者が多かったようである。しかしながら阿部氏によれば、これだけ大人をも魅了する絵本の「絵」だからこそ、大変強い効果を持っており、あまりに強烈な絵だと子どもに強くイメージを残してしまうという危険も存在するという。この点は、前期においでいただいた加藤氏の「頼光」に関する講演とも、塚崎氏の「ルサールカ」に関する講演の内容ともつながるものである。この三つをすべて聴講していたアシスタントの学生は、授業をオムニバス形式にして、同じ受講生に授業したら、もっと強烈な印象を与えたのではないかという意見を言っていた。ところで本授業は、約60人の学生相手の、大きな教室での講演だったため、後ろの方は絵本が見にくかったようである。教室や人数に応じた機材の活用にもまた、ホスト校あるいは世話役がもっと気を遣っていかなければならないと反省した。本講演の「おもしろくなかった点」（設問４）の自由記述欄には、上記の「絵の見づらさ」を指摘する意見はあったものの、ほとんどは「（おもしろくなかった点は）ありません。とてもおもしろかったです。１時間半があっという間でした」（国際３年女性）という回答ばかりだった。この、もっと話を聞きたかったという意見の延長線上に、「もっと意見交換をしたかった」という意見もみられ、受講者たちが受身なだけでなく、積極的に授業に参加したがっているということをも感じさせられた。

この授業が「読み聞かせに役に立つ点」（設問10）に関する自由記述では、講演の中で先生が説明された、表紙や見開きなどといった、本来気にかけないような箇所の絵も見過ごさない絵本の楽しみ方を、子ど

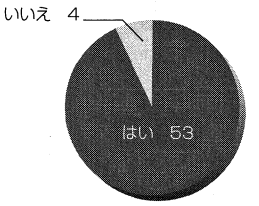
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



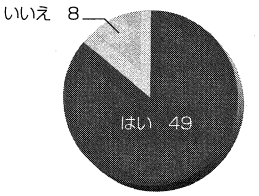
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



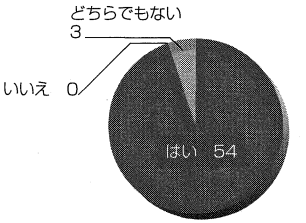
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



もたちに読み聞かせる際に活用していきたいという意見が目立った。また、子どもたちに強烈な印象を与える絵本は避けるべきだという意見もたくさんあり、読み聞かせの絵本を選ぶ際には注意していきたいと多くの人が考えていた。大人の楽しむ絵本と、子どもの楽しむ絵本とを、区別する目が大切であり、上手に絵本を選択していかなければならないという意識が芽生えたのではないかと思われる。これまで、安ければ安いほどよいと思っていたであろう絵本選びに関して、「絵本は値段ではなく中身だ」と思うようになった学生の気持ちがストレートに表れていた。絵本を選ぶポイントや楽しさ、注意すべき点、絵本の楽しみ方など、絵本を読み聞かせる際に重要な事をいろいろと学ぶことができた講演であった。【例：「将来自分の子どもに絵本を読み聞かせるとき、どのように絵本を選べばよいか、考える機会としてとても役立った」（国際３年女性）】。

「読み聞かせをする際の注意点」（設問９）については、子どもの想像力を膨らませるように読みたいという意見が多く、自分の主観を押しつけたり、強烈な絵を見せたりして、子どもの豊かな発想を邪魔するようなことがあってはならないと考えているようである。読み聞かせの後などに質問をしたりして、コミュニケーションをとり、子どもの想像力を掻き立てるようにしたいという意見もあり、子どもの想像力をいかに重視しているかが手にとるようにわかる。これは、講演の際に、先入観や強烈な絵によって、子どもの想像力の芽が摘まれてしまう危険性について学んだことが影響していると思われる。【例：「ある一つのお話でも、本当にたくさんの絵本があり、絵を見せてあげることの意味、インパクトの危険性がわかりました。話は想像してその場面、風景、声などを思い浮かべて私は読んでいたので、『絵本』であることの意味を考えさせられました」（国際３年女性）】。また、読み聞かせの際にはゆっくり読み、子どもがお話を理解できるようにしたいという意見や、リズムなどにも気をつけ、感情を込めて読み、子どもが話に入り込めるように工夫したいという意見もあった。

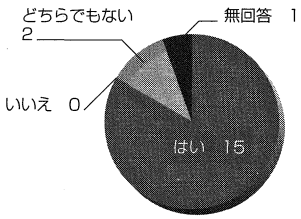
第８節　朝鮮昔話における鬼とトッケビ

東京大学東洋文化研究所助教授真鍋祐子氏による実験授業「朝鮮昔話における鬼とトッケビ」は、愛知教育大学2006年度後期金曜３限、幼児教育を専攻する３年次の学生を対象とした専門科目「家族援助論」の枠内で、授業担当教員である幼児教育講座新井美保子助教授の協力のもと、2006年12月１日金曜３限（13:20～14:50）に、同大学保健体育棟幼児心理学実験室にて行われた。受講生は26名であった。

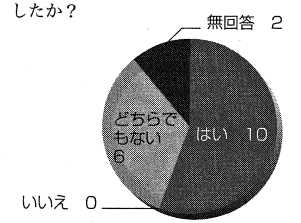
朝鮮昔話における「トッケビ」と呼ばれる表象のさまざまな形姿を、韓国の絵本を通じてまず紹介していただいた。和訳では「鬼」と訳されることが多いそうだが、このトッケビは、時には妖怪のような姿、時には鬼のような姿、時には１本足、時には２本足で、また、幽霊のようなイメージで描かれたりするという。絵本のみならず、氏が、韓国留学時に現地の学生に描かせたトッケビ像からも、さまざまなイメージを垣間見ることができた。しかしながらそのイメージは、年代毎に変わっていっているようであり、特に90年代になると、アニメのキャラクターのような姿も見受けられるようになる。さらに、角があり棍棒を手にしているイメージは、まさに日本の鬼のイメージであり、日韓の文化の類似性を指摘しがちであるが、ここには日本が行った植民地政策という背景を伴った、朝鮮における日本文化の受容があったことを見逃してはならないという。絵本あるいは昔話の表象を通じて、その社会学的観点の重要性を教えられた授業であった。

真鍋氏の実験授業を「興味深かった」と答えた受講生は、回答総数18名中、83%の15名であった。また、この授業を「もっと聴いてみたいか」（設問２）という問いに「はい」と答えたのは56%（10名）と割合がやや下がっている。この原因としては、この授業を通じて初めて、朝鮮の昔話について、またはトッケビの存在を知った受講生が多かったため、少しあった戸惑いが尾を引いているようである。これは、斎藤君子氏や塚崎今日子氏の「大きなかぶ」、「ルサールカ」の舞台となっているロシアについての予備知識が、受講生全般に不足していたことと同様である。このような予備知識の不足を前提に、今後も授業あるいはセミナーを展開しなければならない必要性があり、これまでの専門家相手の研究発表ではないということを、人社プロの研究員全員が改めて自覚しなければならないと強く感じられた。ところで、真鍋氏の授業に話を戻すが、氏が韓国留学中に行われた、韓国人にとってのトッケビのイメージについてのアンケートでは、トッケビの容姿が、１本足や日本の鬼のようであったり、さまざまに変化していることに関心を持った学生が多かった。【例：「私は“トッケビ”と聞いた時かわいいキャラクターを思い浮かべてしまいましたが、すぐに鬼のような得体の知れない存在だと知って驚きました。トッケビについての固定されたイメージがないからこそ、人それぞれのイメージがあっておもしろいなと思いました」

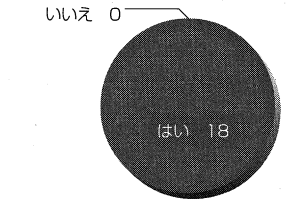
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



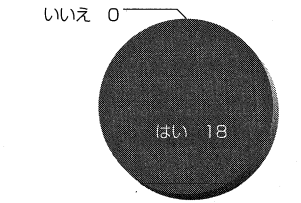
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



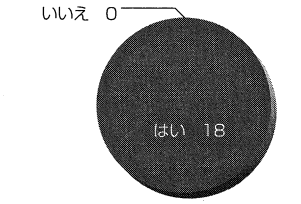
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



(初幼３年女性)、「初めて、トッケビという言葉を聞き、知りました。トッケビが出てきた話は、すごくおもしろかったです。お化けだったり、鬼だったり、すごくいいトッケビだったり……。トッケビというイメージがたくさんあっておもしろかったです」(初幼３年女性)、「ちょうどゼミで外国の絵本について調べたいと思っていたので、トッケビの話おもしろかったです。ババパパみたいだなと思いました」(初幼３年女性)】

日本と韓国は歴史的に深く関わりのある国であることから、韓国の特に若い世代のトッケビ像に、日本の鬼のイメージが見られることに関する、植民地政策という観点からの解釈に興味を持った学生も多かった。また、韓国の学生によるトッケビの絵も、より学生の興味を引いたようだ。このように、日韓の歴史、韓国の学生の絵を見ることで、トッケビを通じて、国際理解の視点も養われたようである。授業中は、朝鮮の「シンデレラ」についての話にもなった。真鍋氏が、「朝鮮のシンデレラは、靴やスリッパではなく、足袋を片方落としていくのだけれど、脱ぎにくいと思わない！？」と言われた時には、笑いの渦となった。【例:「小豆ちゃんの話（シンデレラ）がすごく印象深かったです」(初幼３年女性)、「『コンジパッチ』の話。シンデレラのガラスの靴も、“靴を片方残す”ということは、男女の関係を持ったということを表していると聞いたことがあります。全世界共通なんだなと、おもしろかったです」(初幼３年女性)】

「興味が湧かなかった点」(設問４）に関しては、「画面が見にくかった」、「説明が早口だった」といったものがあったが、これもごく少数意見で、大半の学生が記入なしである。この「画面」とはOHCのことであるが、この画面が見づらいという点は、実物の絵本提示もあったことで、ある程度カバーできたようであり、多くの学生がこの授業に満足していたと思われる。

この授業が絵本の読み聞かせに「役に立つ点」(設問10）に関する自由記述では、昔話の成立した過程や文化背景について知っておくことの重要性を認識したという回答が多かった。また、絵本の挿絵が固定的なイメージを与えるという点を学べたことが、これから幼稚園児に臨機応変に対応していく上で役に立つという意見、なかには、挿絵のない絵本、あるいは絵本の挿絵を見せずに読み聞かせることで、子どもの想像力を大切にできるのではないかという意見も見られた。【例：「昔話がどのようにできたか、どのような状況、心境から話ができたのか理解し、それも伝えることができたらいいなと思った。人によってイメージするものは違うので、一人一人のイメージを大切にしたいと思った」(初幼３年女性)、「日本のイメージで外国の話を見てはいけないと思った」(初幼３年女性)】また、今回の講演を聞いて、子どもの読む絵本に関しても、植民地という歴史を背負った韓国との関わりがあることを知ったことから、社会的なことを幼稚園児に話すのは難しいかもしれないが、子どもたちに、絵本を通じて隣の国の少なくとも紹介ができると考えた学生も見られた。【例:「物語の背景(文化など）がよくわかって、子どもたちに誤解のないように話して聞かせることができると思います」(初幼３年女性)】

この授業の受講者に、「読み聞かせの際に注意する点」(設問９）を聞いてみると、子どもの想像力を促すために、読み手が、先入観を持たずに読み聞かせるということを挙げた学生が多かった。これは、絵本を読む際の心構えとしてとらえることができる。あとは、テクニックの問題として、絵本の登場人物によって声色を変える、絵本を読む雰囲気作り、挿絵がしっかり見えるように気を配る、子どもとのコミュニケーションを重視するという意見があった。これは、この講演を聞いた学生が幼児教育の学生であることから、幼い子どもを意識した意見であると考えられる。

第９節　イギリスのシンデレラ

静岡文化芸術大学助教授美濃部京子氏による実験授業「イギリスのシンデレラ」は、愛知教育大学2006年度後期月曜４限、国際文化コース３年を対象とした専門科目「ヨーロッパ文学特論」の枠内で、授業担当教員である筆者大野寿子（当時、外国語教育講座講師）の協力のもと、2006年12月11日月曜４限（15:00〜16:30）に、同大学第一共通棟203教室にて行われた。受講生は65名であった。

美濃部氏の講演は、提供授業で、「シンデレラ＝灰かぶり」型メルヒェンの比較を扱っていることを最大限に利用し、「シンデレラ＝灰かぶり」型話のイギリスの類話、正確に言えば、アイルランド、スコットランド、イングランドといった文化圏における類話を数多く紹介し、その類話の文化的背景と特性にせまるものであった。授業内容の詳細は、アンケート分析とともに述べることとする。

アンケート回答総数57名中、この授業が「おもしろかった、興味深かった」(設問１）と回答した受講生は91％（52名）であり、大変高い満足度がうかがえる。美濃部氏の実験授業の「おもしろかった点」(設問３）の自由記述は、以下のように要約できる。まず、美濃部氏の講演でイギリス版のシンデレラを知って、各国のシンデレラ型の話の相違点に興味を示した受講生が大変多かった。これは、もともとの授業が上述どおり「灰かぶり＝シンデレラ」型メルヒェンをテーマとしているので、そのグリム版（ドイツ)、ペロー版（フランス)、バジーレ版（イタリア）をすでに読んでいたためである。しかも、その「灰かぶり＝シンデレラ」型とは、アールネ／トンプソンの民話タイプ〈通称AT〉510型の類話群を指すということを学んでいた学生たちが受講者であったことが幸いしたと思われる。【例：「ドイツ・フランス・イタリア版のシンデレラと、今回学んだイギリス版のシンデレラでは全く違っていた。“The little Bull-Calf”について、もっと詳しく知りたいと思った」(国際３年女性)、「シンデレラのまた全然違う話を読んで、王子さまも出てこなかったり、くつも出てこなかったりして驚いた」(国際３年女性)、「イギリスのいぐさ頭巾の話は他のどの灰かぶり型と違って驚きました。不思議な力で与えてもらった幸せではなくて、自分の才知と努力で幸せになったという印象を受けました」(国際４年女性)】。また、イギリスの「灰かぶり＝シンデレラ」型メルヒェンである、“The little Bull-Calf”に興味を示した学生が多かったその理由として、男の子が主人公であったことが大きな理由のようである。また、「継父の登場」、「ダイヤ」、「舌」、「切り取られた指」という、全く別の小道具が使われていたことも、この話に興味や関心を抱かせたようだ。【例：「シンデレラ型の話は女の子が主人公のものばかりだと思っていたけれど、男の子が主人公で同じような話もあるんだと知って驚いた」(国際３年女性)、「男の子が主人公に

なると、イジメるのも継父になってしまうところが印象に残った」（国際３年女性）】さらに、イギリスのシンデレラ型の話には、主人公への援助者として動物が登場するということ、そして地域によってさまざまな類話があるという点に興味を示している。【例：「イギリスにはたくさんの類話があるんだとわかりました。イギリス内でも、イングランド、スコットランド、またアイルランドと、地域によって題名が異なったり、類話の有無が異なったりするとわかり興味深かったです。」（国際３年女性）、「援助を与えてくれるのが、動物（雄牛など）というのもおもしろいと思いました」（国際３年女性）】また、シェイクスピアの『リア王』と「いぐさ頭巾」との、「塩の価値」というモティーフを通じての関連性におもしろさを感じた人が一番多かった。昔話を下敷きにして有名な文学作品が作られたのではないかという関連性に、興味を示したようである。【例：「いつもの授業でAT510型についての話がありましたが、『塩の価値』については具体的な話を読んでいなかったのでよくわからなかったですが、今回『いぐさ頭巾』を聴いて理解できました」（国際３年女性）】

「シンデレラ」に関するイメージは、ディズニーアニメを通じてある程度固定化しているのが、日本社会における現状であり、それは、幼稚園教員や小学校教員あるいは一般的な母親父親とて変わりはない。

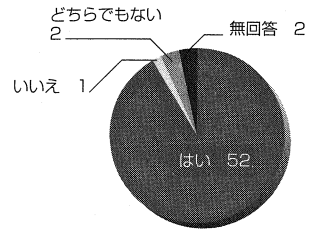
この「シンデレラ」のイメージは、氷山の一角であり、日本ではあまり知られていない部分の類話や地域性、時代性を知ることは、知っていて損はない教養の一つとなるのではないか。その教養豊かな人間が、子どもに昔話を伝承するということが、子どもの想像力を豊かにする手段の一つであると思われる。しかしながら、この手の教養は、当の大人が「楽しい」、「おもしろい」と思わなければ意味のないものであり、その点で美濃部氏の講演は、昔話や伝承の、日本における固定観念を破壊する意味合いを持ちうるのではないか。また、我々は、絵本の読み聞かせや昔話をテキストとする幼稚園教員や小学校教員といえば、どうも女性を想定する悪い癖がある。これもまた悪しき固定観念の一つであろうが、授業受講生にも男性が混じっているように、「シンデレラ」に興味を示すのはなにも女性ばかりではない。「シンデレラが、実際とイメージでは随分と差があるのだと思った」（情報３年男性）という男子学生からの率直な感想もまた、男性教員や父親にも「読み聞かせ」の現場を積極的に担ってもらう、いいきっかけとなるように思われる。

この授業の「おもしろくなかった点」（設問３）として多く挙がっていたのは、“The little Bull-Calf” の英語テキストのみが配布され、和訳が配布されなかったことである。ただこれは、単純に和訳が面倒くさいという意味だとすれば、「おもしろくなかった点」とは言えず、むしろ授業受講生の反省点であろう。

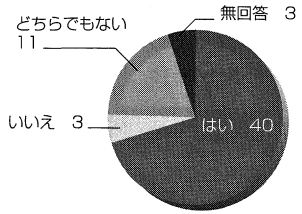
この授業が「読み聞かせに役に立つ点」（設問10）を要約すると、上述の「おもしろかった点」と重複する部分も多いが、以下のようになる。

まず、シンデレラは、ペローやディズニーによって描かれた有名なストーリーだけでなく、国や物語の収集者によってさまざまな型があると知りえたことで、読み聞かせの際に、いろいろなシンデレラの話を聞かせてあげることができると考えた人が最も多い。また、シンデレラに限らず、他の話にもさまざまな類話が存在していることを知り、いろいろなバリエーションで読み聞かせを行いたいと考える人もいた。【例：「“しるし”になる物は、ガラスの靴だけではなく、他のタイプのシンデレラだと指輪になることもあるんだよと伝えたい」（国際３年女性）、「ペローやディズニーなど、日本で一般的に知られている灰かぶり型だけではないということも、教えてあげると良いと感じた」（国際３年女性）、「〈ガラスの靴を履いて王子様と幸せになる〉というカテゴリー化された図式ではなく、さまざまな話が存在するという事実を知れたことは、とても役立つのではないでしょうか。シンデレラならそのパターンの各国の話を聞かせてあげることで、ガラスの靴とかのイメージが薄くなればいいな、と思います」（国際３年女性）】また、同じ話のいろいろなパターンを読み聞かせ、子どもたちに類似点を気づかせることで、自分で考える力や発見する力を身につけさせ、各国の話に興味を持たせることができる。そして、比較するおもしろさを学ばせることができると考えた人もいた。【例：「似た話を読んで、類似点なんかも子どもに気づかせてみるのもおもしろいかなと思いました」（国際３年女性）】 昔話や民話にはさまざまな類話が存在することを知り、先入観や一つのものにとらわれすぎている危険性に、まず、話し手が気づくべきであるという、心構えに関する意見もあった。【例：「昔話、民話にはさまざまな類話があるので、一つの型にとらわれてはいけない点。普段よく知っているものと、そこから少し違うものを示してやることで、子どものイメージは広がり、また“当たり前”という考えもくずしてやることができるのでは？」（国際３年女性）】たとえば、イギリスのシンデレラに関しては、「塩の価値」に関わることを

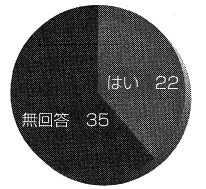
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



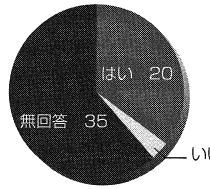
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



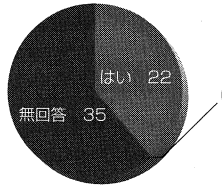
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



子どもの頃に聞いていると、中学・高校でシェイクスピアの『リア王』にふれたとき、昔の記憶がよみがえり、より一層の関心を抱くことができるという。つまり、子どもたちが将来、絵本や昔話に関連した文学作品に出会うことを想定し、読み聞かせをすることもできるというのである。読み聞かせというものが、その場限りのものではなく、将来、文学や外国に対する興味につながることをしっかりと認識して、読み聞かせができたら、こんなにすばらしい生涯学習はないのではないだろうか。

第10節　現代インドにおけるラーマ物語の受容

大阪外国語大学[7]講師長崎広子氏による実験授業「現代インドにおけるラーマ物語の受容」は、愛知教育大学2006年度後期木曜４限、国語教育を専攻する３年次の学生を対象とした専門科目「日本文学講読」の枠内で、授業担当教員である国語教育講座横山信幸教授の協力のもと、2006年12月14日木曜４限（15:00〜16:30）に、同大学第一共通棟309教室にて行われた。受講生は34名であった。

長崎氏の授業では、大変な長編であるラーマ物語のあらすじを簡潔に説明されたのち、氏のフィールドワークの賜物である、インドの巡礼地をたどった貴重な映像を見せながら、その土地と物語と信仰との結びつきを説いてゆかれた。わが地こそラーマ物語ゆかりの地であるという故事から、場合によってはラーマ物語にはない挿話が加えられたり、あるいは明らかに観光目的に物語を利用していると見なさざるを得ない場面もあったりした。しかし、この話の「変容」もまた、「ラーマ物語」という伝承が「生きている」という証なのではないかと訴えかけるようでもあった。

アンケートの回答総数26名中、長崎氏の講演を「おもしろかった」（設問１）と答えた受講生は、18名、全体の69％に上る。「おもしろかった点」（設問３）では、写真などの映像資料が多く、視覚からも情報を得ることによって、それが興味深かったという意見が多かった。また、現在でもラーマに関する場所や物が、インドでは大切にされていることがわかり、「ラーマ物語」が日常生活に浸透しているということが、印象に残ったという。その例としては次の二つの意見が挙げられる。

「スライドやビデオを使って物語の説明をされていたので、具体的なイメージが湧きました。インドがどういうところか、ということは（説明の範囲内で）よくわかりました。また、先生の生き生きとした話し方が印象的でした。見習わなくてはならないところです。ありがとうございました」（初国３年男性）

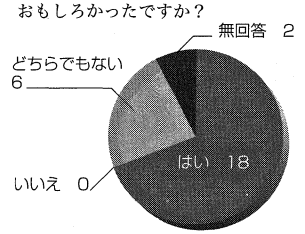
「おもしろかった点……インドの生活、文化をかいまみることができた点。印象に残った点……伝承文化という歴史的価値のある存在を、今の人は歪めたり都合よく使って、勝手に新しい文化をつくってしまうという点。文学的価値やストーリーの真実を無視し、大切にすることを間違えているのはいかがなものかと思った。もっと知りたくなった点……インドの〈物語〉をはじめとする文学に対する考え方、価値観」（初国３年男性）

長崎氏が現地で撮ってこられた写真や映像を見ることで、「イメージ」がより「具体化」されたという感想は、子どもが絵本の絵を見て、未知のもののイメージを膨らますことに重なるものがある。インドに関する情報は、現代日本では十分であるとは言いがたい。その不十分な情報の隙間を埋めていく手段として、体験記、映像資料が有効であることはいうまでもないが、それ以上に大切なのは、その内容を「生き生き」と話すことができるかということであろう。すなわち、長崎氏は、ご自分の撮影された資料を用い、ラーマ物語の巡礼地を説明しながら、授業を展開されたのであるが、ご自分でその地を体験されたからこそ、途中でいろいろな補足説明やこぼれ話が入り、楽しかったのである。学生たちは、そのようなものも含め、話の瑞々しさを感じとり、その「生き生き」とした語りを、「おもしろい、興味深い」と感じているのである。すなわち長崎氏は、大学生相手に、絵本の読み聞かせ、語り聞かせを行われたも同然であり、彼等の感じたことが、そっくりそのまま、子どもたちがどの点を「おもしろい」と思うのかの重要な資料となりえる。本授業が、他のどの実験授業よりも、読み聞かせの実験的要素が濃かったと言える要素として、受講生が、「ラーマ物語」についてもインドについてもほとんど知らなかったことが、大変大きいように思われる。

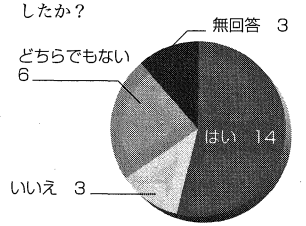
ストーリーを無視し、勝手に作り変えたり、その一部を無理やりある土地に結びつけたりする点を批判している意見もあったが、これに関しては、齊藤純氏の「桃太郎神社」の例があるように、なにもインドだけの例ではない。もし、本講演の受講生が、齊藤純氏の講演も受講していれば、そのあたりをもっと普遍的にとらえることができたであろうことを考えると、このような実験授業を、同じ受講生に連続して受講してもらうことの重要性が浮かび上がってくる。

本授業の「おもしろくなかった点」（設問４）としては、手元でじっくり見ることができる資料がなかったことが挙がってい

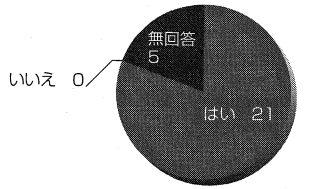
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



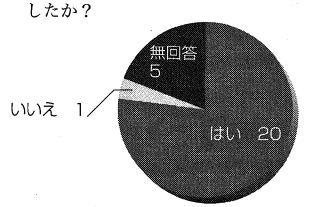
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



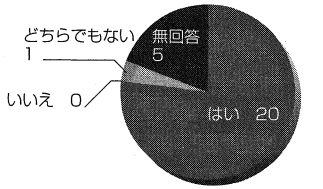
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



る。テーマが未知の領域のものだったので、レジュメなどの資料が欲しかったという意見が多かった。ただそれは、たくさん見せて下さった映像資料の価値を否定するものではなく、その映像資料と長崎氏の話を、見逃さないため聞き逃さないために、耳慣れない地名や神の名前等の固有名詞に関する資料や、簡単な地図が手元にあればもっとよかったと言っているのである。

この授業が「絵本の読み聞かせに役に立つ点」（設問10）として受講生が挙げていることは、物語の背景を知っておくことという意見に集約される。そうすれば話以外のことも教えられるし、また自分の意見も言えるというのである。自分が受講生として、さまざまな物語とその背景を聞き、おもしろいと思って初めて言うことのできる、大変貴重な意見であると思う。すなわち彼等は、全く未知のテーマについて、絵を交えいろいろ聞いた後、聴き手である子どもの立場に立って考えるという大変大切なことを、すんなりやってのけているのである。彼等のことばの端々に、聴き手の立場に立って考えているということを、他の授業よりも多く感じとれた。【例：「物語に対する自分の思いを、語ること、思いによって多少つけ加えたりすることも、自分の生き方や見方を伝える上で意味あることだと思った」（不明 女性）】また、「話はそこで完結するものではなく、続きを作ったりして、その話のおもしろさを膨らませること」ができるということを学び、それを読み聞かせに生かしたいという意見もあった（初国３年不明）。読み聞かせも語り聞かせも、その物語のオリジナルを知ること（たとえば美濃部氏の授業アンケートなどで多く見られた意見）と、それを生き生きと語るための、ある程度の即興性や臨機応変さの両方ともが大切なのであり、読み手・語り手は、その年齢や場面に応じて、そのバランスをとっていかねばならないのだと思う。

第11節　昔話の国際伝播 ── はなしはどのようにして伝わっていったのか ──

関西外国語大学名誉教授三原幸久氏による実験授業「昔話の国際伝播 ── はなしはどのようにして伝わっていったのか ──」は、愛知教育大学2006年度後期月曜４限、国際文化コース３年を対象とした専門科目「ヨーロッパ文学特論」の枠内で、授業担当教員である筆者大野寿子（当時、外国語教育講座講師）の協力のもと、2007年１月15日月曜４限（15:00〜16:30）に、同大学第一共通棟203教室にて行われた。受講生は60名であった。

本授業で三原氏は、民話の伝播という現象について大変わかりやすく説かれ、また、氏の長年にわたるスペインや南米におけるフィールドワークに裏打ちされた、スペイン語ポルトガル語圏の文化事情を、時には心地よいジョークを交えながら説明された。特に、スペイン語圏の「シンデレラ」について説かれた際に、ストーリーは同じAT510型でも、その文化的、政治的、宗教的背景により小道具が変わってくるのだということを説明された。そのとき、それを聴く受講生の目が一段と輝きを増したことが印象的であった。

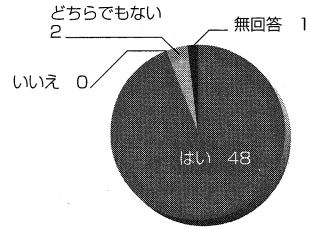
本授業のアンケート回答総数51名中、「おもしろかった」（設問１）と答えた学生は48名であり、全体の94％に上る。また、「もっと聞いてみたい」（設問２）と答えた受講生は、全体の84％（43名）であり、学生の本授業への高い関心のほどがうかがえる。また、スペインのシンデレラの特徴であるはらわたや牛といった、民俗性があらわれている点をおもしろいと感じた人も多い。

「おもしろかった点」（設問３）では、まず、日常ではあまり馴染みのないスペインの話、特にスペインの「シンデレラ」型メルヒェンについての話がとても印象に残ったようである。民話の背景にある文化についての大変丁寧な説明が、彼等には大変おもしろいと感じられたようである。

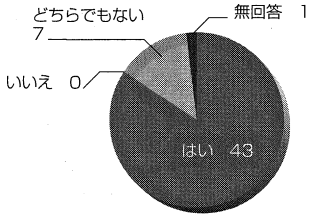
「先生の、日本や世界のスペイン以外のいろいろなお話について聞けたのが印象深かったです。特にスペインの言語に関してのお話は楽しかったです。物語の表面ではなく、その背景にある民族の風習や思想を講演していただけたところがよかったです。またぜひ来ていただきたいです」（国際３年女性）。「日本は農業国だから、イネや米と昔話が切り離せないのと同様に、スペインでは牛が大切にされているから、昔話にも牛が反映されているということに驚きました。宗教や地理も話を作るのに利用されるのだと思って、物語に親しむことで、その国のことを知る機会にもなるのだと感じました」（国際３年女性）

このように、民話にはその時代、その土地の文化が反映されいることを、スペインと日本の食文化や宗教を比較しつつご説明くださった箇所が、特に印象に残っているようである。【例：「スペインの話だけではなくて、日本の昔話も交えて比較しながら話してくださったのでとてもわかりやすかったしおもしろかった。スペインの話には牛が必ず出てくるようで、やっぱり話には国の文化が反映されるものなんだと思いました」（国際３年女性）】 また、「伝播」に関する問題で、特に口頭伝承と「記録」あるいは「記述」との密接な関係に、興味を持った学生もいた。【例：「物語だけに限り

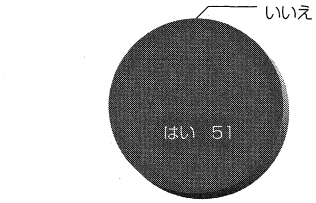
1. 本日の授業・講演の内容は興味深かったですか？おもしろかったですか？



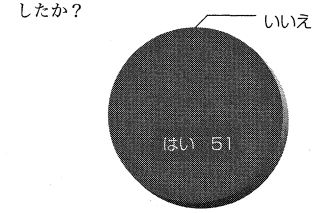
2. 本日の授業・講演をもっと聴いてみたいと思いましたか？



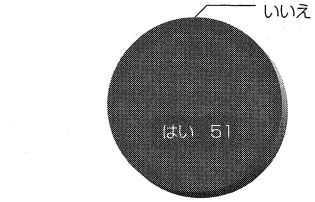
5. 子どもの頃、絵本や昔話を読みましたか？



6. 子どもの頃、絵本や昔話を大人に読んでもらいましたか？



7. 自分の子どもや園児、児童に絵本や昔話を読んで聞かせたいと思いますか？



ませんが、記録していかないと、資料として残らないというのは非常によくわかると思います。研究したくても、すでに残っていないということはよくあります（私の専門は歌ですが）。そういう時は資料に残すということの必要性を感じます。伝播はどのような人を経るのか、それによって物語にどんな性格が加わるか、という視点はおもしろかったです」（国際３年女性）】さらに、「笑い話」というジャンルについて、自分の失敗談を滑稽に話せば人を傷つけることはないという点に、対人関係のモラルを見いだした受講生もいた。【例：「昔は話し手が自分の失敗談などをおかしく話し、自らが笑われるよう話してたという点。人を楽しくさせる人は、人のことを笑いはしないということに感心しました」（国際３年女性）】 昔話や民話には、その土地独自の文化と人間の生きざまが結晶化しているということを、三原氏は大変わかりやすく説いてくださったように思われる。また、本授業の「おもしろくなかった点」（設問４）では、「もっとスペインのシンデレラについて話が聞きたかった」、「もう少し『シンデレラ』について深く語ってほしかった」、「もっと長時間または、回数を多くしてほしいと思う」と、時間が短かったことに対する不満がほとんどであり、学生たちが、三原氏の長年にわたるご研究に基づく授業に大いなる魅力を感じ、それを素直にもっと聞きたいと願っているように思われた。

本授業が「読み聞かせに役に立つ点」（設問10）としては、同じ物語でも、各国の特徴によって話が異なるということを知ったことが、これからの読み聞かせに役に立つと感じている学生が多い。たとえば、以下のような意見がある。

「同じ物語でも、国や書き手によって話が変わっていくので、自分の知っているある物語の内容はこれだと決めつけるのではなく、さまざまであることを理解した上で読み聞かせをしなくてはならないという点」（国際３年女性）

このような的確な意見を聴取できたのは、もちろん三原氏の大変魅力的な授業の賜物であることに疑う余地はないが、その前に、もともとの授業提供が「シンデレラ＝灰かぶり」型メルヒェンを比較考察する授業であったことと、受講者全員が、阿部氏の「絵本」に関する実験授業、美濃部氏の「イギリスのシンデレラ」を受講していたことにより、受講生全員に「シンデレラ」の類話に関する基礎知識が定着していたからであろう。さらに、彼等は、「絵本」や「翻訳」の魅力と危険性を学んでいる。同じタイプの話が、全く文化の違う地域に伝播する、あるいは翻訳される時に起こる「変容」もまた、その変容プロセスを知ることにより、もっと楽しめる素材として扱えるということを、彼等は感じているように思われる。また次のような意見もあった。

「物語の表面ではなく、その背景を知ることで、多彩な受け止め方を子どもたちに与えることができると思います」（国際３年女性）

この意見はまさに、我々人社プロが、現代の伝承の担い手へと伝えたかったメッセージそのものである。各国の文化や歴史的背景を知ることによって、より豊かな読み聞かせをすることはでき、子どもたちからの疑問にも答えることはできる。しかしながら、まずその前に、昔話や民話を、子どもの世界のものだと遠巻きにとらえるのではなく、その成立過程や文化的背景、その話の深部にあるものの重要性や類話の多様性、その変容のおもしろさを、まずは大人が愉しんで、それを「おもしろい」と感じなければ、子どもに伝えたいとは思わないであろう。阿部氏の授業の一節ではないが、絵本の絵には、画家がやっつけ仕事で描いたものと、そこに自分なりのこだわりとメッセージ性を託して、いわゆる作品として仕上げたものとあるようで、それは絵の魅力となって表れるのだという。そうだとしたら、我々大人も、子どもへの読み聞かせや語り聞かせを、マニュアルやテクニックにしばられた、いわゆる「やっつけ仕事」にしてしまってはならないのではないか。この点で、三原氏の実験授業は、「やっつけ仕事」とは正反対の、まさに「豊かに語る」ということが、「語りの魅力を増す」ということのお手本のような授業であったことを、最後につけ加えておきたい。

おわりに

アンケートの設問９、設問10に寄せられた意見は、第３章の個々の分析の中で述べてきたが、ここでその全体像を総括し、結びとする。

９．絵本や昔話を子どもに読み聞かせたり語って聞かせたりする時に、注意しなければならない点は何だと思いますか？

全体的に大きな声で読む、抑揚をつけて読む、感情を込めて読む、ゆっくり読むなど、読むテクニックに注意しなければならないという意見が多かった。子どもにしっかり伝えようと意識していることが、これらの回答からうかがえる。また、子どもの想像力やイメージを大切にしたいと考えている学生も多く、そのような意見は、大人が一方的にイメージを植えつけてはならないという理念より生まれている。絵本の挿絵は、場合によってはあまりに強烈で子どもに焼きついてしまうため、本の選び方にも注意を払わなければならないという意見は、阿部氏（絵本）の講演を聞いた学生から多く挙がった。また、だれもが知っているような話でも類話というものが存在し、それが必ずしも子ども向けとは限らないものがある。さらに、残酷な場面を消してしまっては、話自体が無意味になってしまうような物語もある。子どものためによいのかどうかという問題は、どこまで行ってもつきまとうものであろうが、○か×かという選択を迫られる際に、話の文化的・歴史的背景を知っておくということが、選択を誤らないためには必要なことではないだろうか。すなわち、「読む」という行為以前に、読み手の知識と心構えとが、大変重要なのである。その心構えがなければ、テクニックが生きることはなく、「生き生き」と語るどころか、マニュアルどおりの、いわば機械仕掛けの語りとなってしまうであろう。話の背景を知れば、昔話にとって、正解がたった一つではなく、正解には幅があるということが容易に認識されうる。すなわち、子どもの自由な想像に任せた発言があったとしても、語り手がこの「正解の幅」さえ認識しておけば、答えに困ることもなければ、子どもの想像力をつぶしてしまうこともないのである。赤羽根氏（桃太郎回春譚）や齊藤純氏（桃太郎神社）の講演の際の回答では、話本来の姿を知っておくことも大切だという意見が見られ、また、美濃部氏（イギリスのシンデレラ）、三原氏（スペインのシンデレラ）の講演の際の回答では、たくさんの種類の話を知っておくと良いという意見が見られたことは、すべて、語り手が「正解の幅」を認識しておくべきだということを物語っているのではないか。

10. この授業・講演の内容が、絵本や昔話の読み聞かせに役立つと思われる点を教えて下さい。

授業を受けたことによって、「絵本や昔話に関する知識が深まり、子どもの疑問にも答えられる」という意見が大変多くみられた。喜ばしい結果である。

それぞれの授業の特色が意見に反映されている。斎藤君子氏（かぶ）の授業では、読み聞かせのリズムなどを重要視している意見が多く、小長谷氏（モンゴル）の授業では、ことばを大切に扱いたいという意見が多く見られた。美濃部氏（イギリスのシンデレラ）、三原氏（スペインのシンデレラ）の授業を受け、「さまざまな類話があることを知ったので、いろんな類話を子どもたちにも聞かせ、各国の類話を比較し、それぞれの国にも興味を持ってくれたら良い」と考える学生もいた。「子どもたちが、身近な絵本というものを入り口にして、各国の歴史や文化にも興味を持ってくれれば、世界を広げてくれる」という希望もまた書かれていた。また、長崎氏（ラーマ物語）の授業では、「語りの自由さ」を認識した受講生が目立った。

阿部氏（絵本）の授業では、同じ題材の絵本でも、さまざまな種類があることを知ることができたという意見、絵本の絵はとても重要であり、絵によってそのシーンの伝わり方も違ってくることを、本の比較を通じて知ることができたという意見が多かった。また、「強烈な印象を与える絵は、子どもに恐怖の気持ちをずっと残してしまったり、子どもの想像力を止めてしまうと授業で教わったので、そういう絵本は選ばないようにしたい」という意見も多くあった。加藤氏（頼光）の授業では、残酷な話があっても、正しい内容を子どもに伝えたいと考える学生もいたが、子どもが恐怖にとらわれてしまう恐れもあり、どう伝えていくのかは、とてもデリケートな問題であるので、しっかり考えて判断したいという意見も見られた。真鍋氏（韓国のトッケビ）の授業を受けた学生からは、「絵本の挿絵が固定的なイメージを与える」という意見が多く、「挿絵のない絵本を読み聞かせることで、子どもの想像力を大切にしたい」という意見も挙がった。塚崎氏（ルサールカ）の授業でも同様、時には絵や絵本を見せないで、主人公を自分の頭の中で想像することの大切さを改めて感じたという意見が多かった。

*

授業の内容も関係しているのであろうが、前半では読み聞かせの際に抑揚やリズムを大切にしたいなど、読み聞かせのテクニックに関する意見が多く見られたが、後半になると、子どもたちを楽しませ、子どもたちの想像力をいかに豊かにするかを、物語の背景を知ることに求める意見が多くなる。「語りの技」と「話の背景」とが、昔話における「正解の幅」を生み出し、語り手が自由に生き生きと語ることを可能にする。「豊かに語る」とはすなわち、「自由」に「生き生き」と、しかし「正解の幅」を意識しながら語るということではないか。そして「豊かな語り」とは、もしかしたら、聴き手（子ども）の想像力をつぶさないだけでなく、語り手もまた語りつつ、物語を常に新しい形で再体験できるということではないだろうか。最後に、今回の「実験授業・講演 in 愛教大」の11回の授業をすべて受講した者として筆者は、この11回の授業が、別々の受講生ではなく、今後、同様の機会があれば、11回とも同じ受講生対象に実施されることを切に願う。

〈注〉

(1) 筆者の現在の勤務校は東洋大学であるが、この実験授業を立ち上げ実施した当時は、愛知教育大学外国語教育講座に専任講師として所属していた。したがって、本報告において、「本校」あるいは「本学」で表されるのは、当時の勤務校である愛教大のことである。

(2) 2007年4月以降、「助教授」は「准教授」という名称に変更されている。また実験授業支援グループの中には、2006年3月をもって退職された方もいるが、本報告では、2005年度、2006年度当時の職位とその名称を使用する。

(3) 愛知教育大学の学芸四課程は、2007年4月より現代学芸課程に変更されている。

(4) 提供授業のもともとの受講学生に対しては単位認定に関わる「授業」、それ以外の受講者に対しては「講演」という性格を有するため、「授業・講演」と併記する。

(5) アンケート分析協力者は以下の7名である（2007年3月に愛知教育大学卒業）。天川ひかる、伊藤友香、大井良子、大野菜美子、神田華子、藤澤麻里、久田亜希。

(6) アンケート回答者の所属を以下のように略記する。国際【国際理解教育】、初幼【初等幼児教育】、中数【中等数学】、初芸【初等芸術】、初科【初等教育科学】、中英【中等英語】、生涯【生涯教育】、中理【中等理科】、環境【環境教育】、自然【初等自然】、情報【情報教育】、中社【中等社会】、生ス【初等生活・スポーツ】、障害【障害児教育】、養護【養護教諭】、人社【初等人文社会（国語）】、中科【中等教育科学】、中国【中等国語】、保体【中等保健体育】。

(7) 2007年10月1日に、大阪大学と統合。